

道 類 媛

昭和二年十月廿五日
昭和八年七月一日發行
（每月發行）

第八年第七號



春潮画筆

御化粧紙

スキナ脂取紙

「大島おけさ」

ヘア 色も香も

おぼこそだちの

しま椿

無理に咲かせて

あこで泣かせる

旅の風

姉妹品として

スキナ石鹸を

發賣致して

居ります

御愛用願ひます



發賣元 大阪南久寶寺町四丁目
朝日堂株式會社
本舖 中田スキナ屋 (大阪)

風味必ず御氣に召す

天ぷら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を!

道頓堀戎げし北詰

支店 大阪支店 北新地 裏町

京都支店 木屋町ドンブリ橋

戎橋 喜久屋北店

(心齋橋筋二丁目)





◇道頓堀・昭和八年七月號・第八十二輯◇

★ 口 ★

◎歌舞伎座七月興行 ◇東西合同大歌舞伎 ◇幻浦島 ◇猿之助の浦島、時藏の乙姫 ◇俊寛 ◇猿之助の俊寛、調子の康頼、段四郎の成經、三人片輪 ◇猿之助の賢太郎、時藏の啞女 ◇巷談天保白浪 ◇魁軍の天學、長二郎の小三郎、時藏の延若、猿之助の角大夫 ◇鳴門の夕霧 ◇福助の夕霧、時藏のお松 ◎中座七月興行 ◇新國劇 ◇夏と伊達者 ◇島田のトンホの吉、小川のバットの安山路のナオミ ◇戊辰戀供養 ◇辰巳の酒井良祐、長嶋のお榮 ◎浪花座七月興行 ◇前進座 ◇旗本退屈男 ◇長十郎の圭水之助、國太郎の女スリ ◇女の選んだ道 ◇甞右衛門の春山、國太郎の妻 ◇安中草三 ◇長十郎の白藏、甞右衛門の草三 ◎角座七月興行 ◇關西新派大合同 ◇女夫波 ◇山口の植村 ◇すて、おくべし ◇武雄の俵、梅村の妻、玉川の戸部 ◇新雨月物語 ◇都築の亡靈、小松の勝代 ◇日高川 ◇梅村の清姫 ◎文樂座七月興行 ◇築地座 ◇晩秋 ◇友田の峰男、田村のマドレーヌ、石川の素那子、清川の岸子 ◇短夜 田村のおよし、清川のおさわ、藤輪の重吉、友田の伊三郎、東屋の專造 ◎南座七月興行 ◇家庭劇 ◇瀧の白糸 ◇石河の瀧の白糸、小町の糸路、香椎の小糸、高田の新藏、小織の權次、山田の村越欣彌、小織の裁判長。

★★表紙 紙 古錦繪版畫
 猿之助の俊寛(スケッチ).....田中滿彦(一)

上半期の劇壇回顧.....西尾福三郎(二)

米の飯.....高谷仲(六)

芝居註文帳.....倉田啓明(一〇)

よう云はんワ.....星ヶ城(三)

霸氣と新鮮さ.....桂田曉香(四)

續街頭で拾った話.....曾我廼家十吾(六)



西側棧

前進せる前進座……………豊岡佐一郎 (一八)

意氣を賞す……………坪内士行 (二〇)

前進座の道頓堀進出……………入江來布 (二一)

さあ前進だ……………中村翫右衛門 (二二)

幻浦島に就て……………木村富子 (二三)

猿之助の人間俊寛……………本山萩舟 (二四)

俊寛の實説……………瀬川春江 (二五)

阿波の夕霧に就て……………林鼓浪 (二六)

猿之助に演らせた役……………森ほのほ (二七)

樂劇 争議ナンセンス……………股野啓二郎 (二八)

中井哲
を思ふ

倭藤丈夫・久松喜世子 (二九)

島田正吾・小川虎之助 (三〇)

山路千枝子・畑中蓼波 (三一)

長嶋九子・雄島三之介 (三二)

二葉早苗・初瀬音羽 (三三)

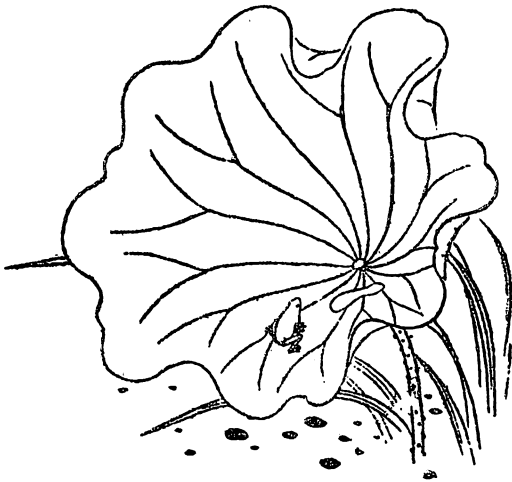
丸茂三郎…………… (三四)

★編 輯 後 記……………田中滿彦 (四二)

標商

錄登

白雪



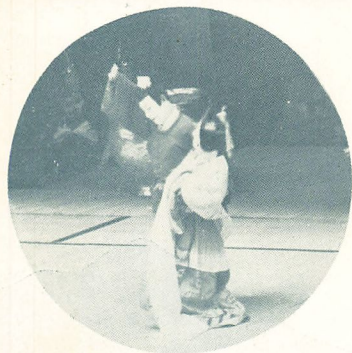
伊丹 小西本店釀 鹿島 本店

大阪市北區伊勢町

電話北
 二二七
 二二七
 二二七
 一八七

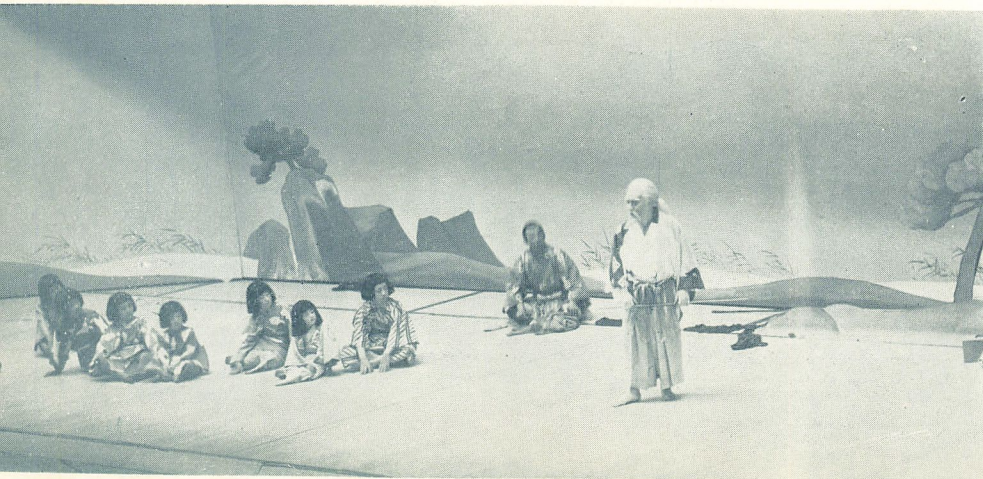


◇伎舞歌大同合西東・行興月七座伎舞歌◇



浦島
市川猿之助
龍宮の乙姫
中村時藏

(浦の江の澄) ◇島 浦 幻◇



歌舞伎座七月興行 東西合同大歌舞伎

『俊』

『寛』

寛 僧 都

判官 康 頼

丹波少將 成 經

市川 猿之助

澤村 訥子

市川 段四郎



三
人



歌舞伎座七月興行

◇ 東西合同大歌舞伎 ◇

壁太郎助

市川猿之助

啞女おまき

中村時藏

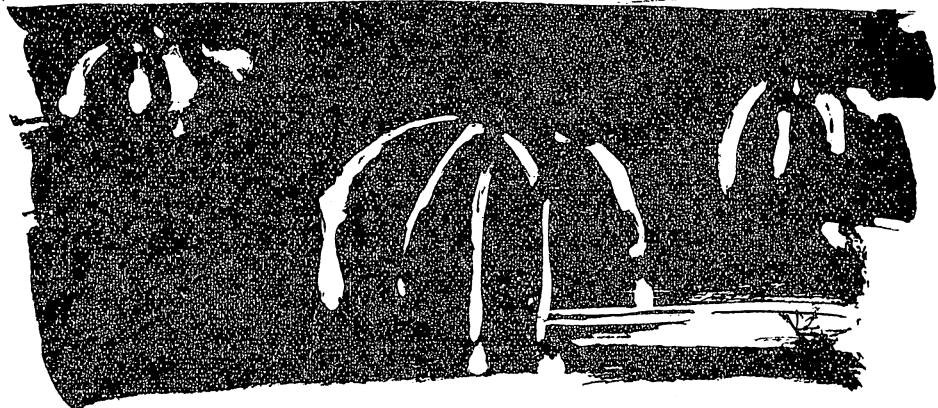
『巷談天保白浪』



歌舞伎座七月興行

◇ 東西合同大歌舞伎 ◇

清元延若	尾花屋小三郎	佐島天學
中村時藏	林長三郎	中村魁車



新
園
祭

新興キネマ夏季超特作

原 作 川口松太郎
 婦 女 界 掲 載
 脚 色 監 督 溝 口 健 二



森岡 静子
 岡田 澄彦
 鈴木 一朗
 月田 共演

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

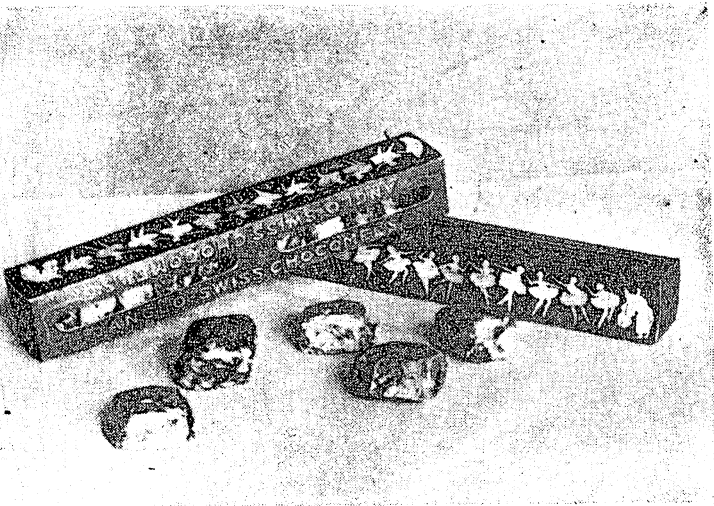
發賣元

株式會社

横山商店

電話東(94)

一六六一
一六六一
四六四九番



生田角太夫
佐島天學

市川猿之助
中村魁軍



『巷談天保白浪』

◇ 歌舞伎座七月興行 ◇

東西合同大歌舞伎

田川三國堤の場



『港天保白浪』

下總佐倉の牢内の場



山の宿自身番の場



◇歌舞伎座・七月興行

東西合同大歌舞伎

駒形堂の場



『鳴門の夕霧』

夕霧 太夫
花車 お松

中村 福助
中村 時藏



東西合同大歌舞伎

◇ 七月の歌舞伎座 ◇

『養 供 戀 辰 戊』

郎太柳已辰 祐長井酒



『夏と伊達者』

トシボの吉・島田正吾
バットの安・小川虎之助



お 酒 井 長 祐
榮 辰 已 柳 太 郎
長 島 丸 子

中座七月興行・新國劇

◇ 座 進 前 ◇

『道だん選の女』

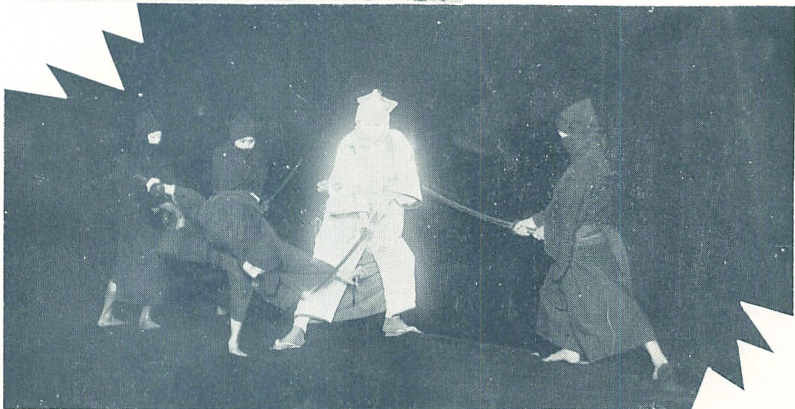
妻 春山金一
お 艶 中村翫右エ門
河原崎國太郎



郎十長崎原河 助之水主女乙早
郎太國崎原河 藤おリス女

『男屈退本旗』

早乙女圭水之助
河原崎長十郎



◇ 浪花座七月興行 ◇

◇ 座 進 前 ◇

『三 草 中 安』

場の屋州上村澤水

白雲の白藏
 河原崎長十郎
 安 中 草 三
 中 村 翫 右 三 門



下
 名
 村
 松
 原
 の
 場



安
 中 草 三
 中 村 翫 右 三 門

浪
 花
 座
 七
 月
 興
 行



◇ 同合大派新西關 ◇

妻 サラリーマン 僕
 奈 美
 友人 戸部
 梅 武 林
 川 村 馨 子
 昇 新



雄 俊 口 山・融村植



男 文 築 都 靈 亡 之 正 隆
 子 孝 松 小 代 勝

『語物月雨新』

『棄ておくべし』

『波 夫 女』

◇ 行 興 月 七 座 角 ◇



『日 高 川』

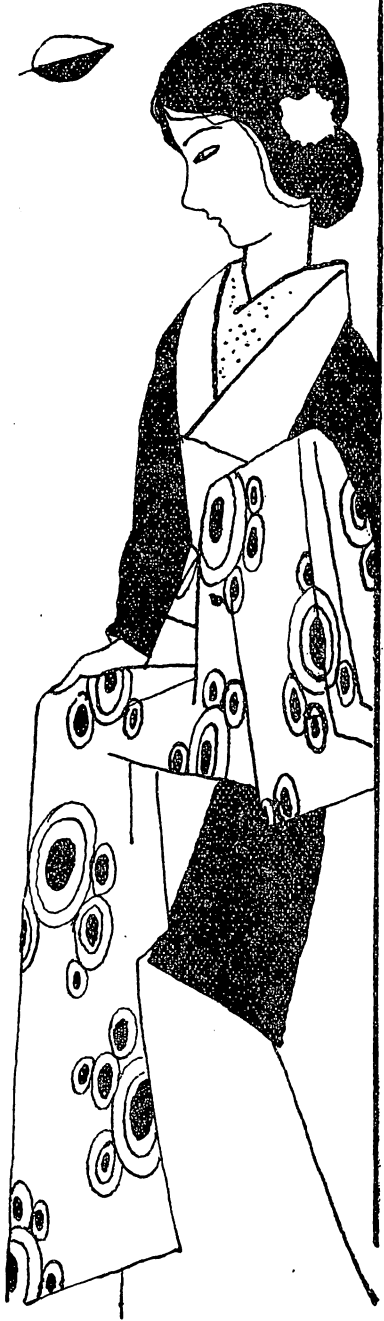
清 姬 梅 村 馨 子



裂 小・具道小
裳 衣 貸

素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松
竹
衣
裳
部



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、御來客の御相談に應し便利よく取計ます)

本 店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
淺 卓 藤 木 町 十 五 番
同電話 淺草 五 五 九 九 番

京の名薬

商標 井 登録

類似品
の
ア
リ
マ
ス

井上清七製ニ特ニ御注意

薬價 五匁・十匁・二十匁・三十匁

いのうへめくすり
井上目薬

古キ歴史ヲ有スル 効能第一

正本家
京 都

井上清七製

振替 大坂 三軒 八番
京都 麩屋町 通佛光寺南

◇築地座◇

文樂座七月興行

『晚』

『秋』

沖峰男 友田恭助



素那子 石川由紀
 入江岸子 清川玉枝
 沖峰男 友田恭助
 マドレーヌ 田村秋子

『短』

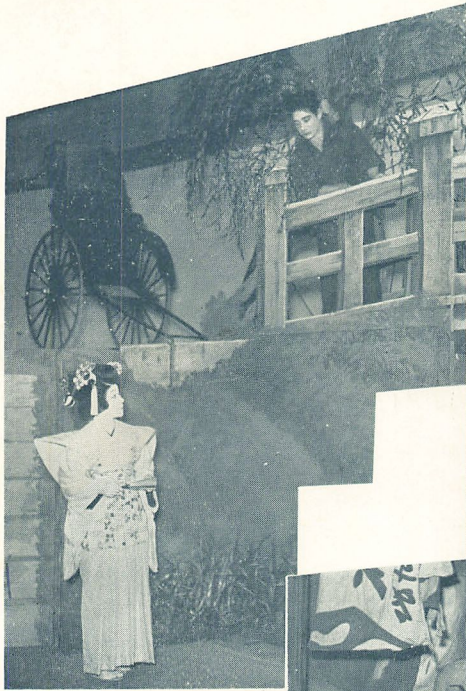
『夜』



およし 田村秋子
 おさわ 清川玉枝
 重吉 藤輪欣司
 専造 東屋三郎

『糸白の瀧』

水の藝の舞臺の場



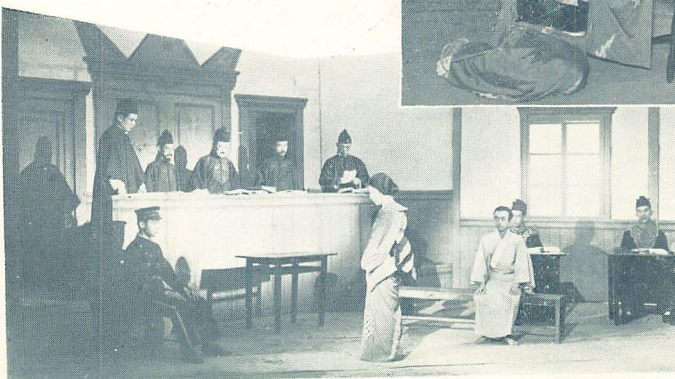
竹松
家庭劇

瀧の白糸
新小糸
藏糸
高香
田樵
園糸
亘子
石河
小町
糸子
薰

権次・小織桂一郎
瀧の白糸・石河 薰
村越欣彌・山田隆也

◇南座七月興行◇

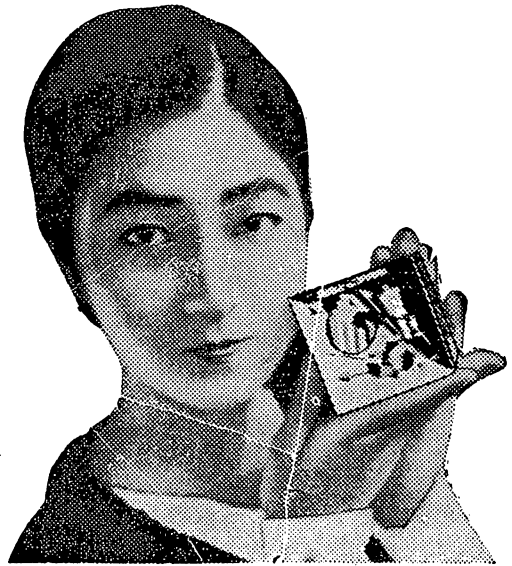
公判廷の場



検事村越欣彌
山田隆也
瀧の白糸
石河 薰
裁判長
小織桂一郎

化粧は創作

鼻筋へ、すうウと一本引いた白さ
それだけでも明るさが冴えます。
頬・額・顎・襟へとびる美しさ
それは一つの創作美です。殊に
手間もかゝらず、苦心も要らず
すなほなノビと平らなツキで
此創作が、いかに容易に完成され
るかを、ぜひお試し下さい。
化粧美は只爰にあるのみです。



千ターニエーム白粉
御園

優れた印刷を
安價迅速に
御用命に應ず

出版印刷

プラトン社

大阪市西區江戸堀南通二丁目
電話土佐堀七九九番九〇七番
振替 大阪 四五番

雜誌·藝術劇演·刊月

七月號

通類編

第八年

第十八輯



猿之的 / 俊寬

一九三三
滿島子



西尾福三郎

上半期劇壇回顧

西尾福三郎

満洲問題から延いての聯盟氣構へでゴタ／＼の内に明け
 た昭和八年、新しく云へば一九三三年、古風に云へば昭和
 癸酉の年の上半期關西劇壇は果して何うであつたか。
 普通ならば、七八の御難月を控へた後半期に比して、冬
 の終りから春を経て初夏までの觀劇シーズンを持つ關係上
 下半期に比して上半期は當然賑やかであるべき筈だ。
 然るに書入れ時の初春芝居に、數十年來吉例の成駒家を
 中心にした歌舞伎が見られなかつたのみならず、正月の大
 阪の劇場に一流歌舞伎の影も見られないと云ふ事は、實に
 うら淋しさの極みだつた。殊に大阪歌舞伎座新築落成の第
 一年に於ける現象だから、或者はこれを以つて今更ら乍ら

歌舞伎没落の徴と聲を大にして叫んだものだつた。

この月歌舞伎座はトキー忠臣藏と長二郎中心の實演。
 浪花座は扇雀小太夫の合同で本藏下郎、辰橋等好評。中座
 は懸案の大菩薩峠を晝夜に亘つての長演技、これが見事ヒ
 ツトして一ヶ月のロングラン、新國劇の人氣は愈々旺んで
 ある。異色のあつたのは寶塚に於ける前進座の「十二刻忠
 臣藏」で、要領を得た脚本の整理と、装置の簡決と、加ふ
 るに二三俳優の好演技とで、恐らく正月劇壇屈指の觀物で
 あつた。

京都は南座に家庭劇、京都座に新聲劇。
 文樂は忠臣藏で何れも特に印象に残る物はなかつた。

二月歌舞伎座は伊井波後の新派を殆んど總動員した觀があつたが、矢張り河合喜多村の二筋道、普話と、井上水谷の紙芝居と明眸禍に人氣があつた。

文樂座は古靱の皮足袋が珍らしく、津太夫の堀川土佐の飯炊きがきゝ物だつた。

京都南座へ猿之助、魁車、壽三郎、我童等で夕霧中の巻坊つちやん等が好評だつた。川村氏の涙の四つ辻が揚げ物に脚色され我、魁、壽で演じられたが、後、我童の代りに福助がこのトリオに加はつて、神戸、大阪と連演して、圖らずも、涙の四つ辻は上半期關西劇壇の興味の中心になつた。

三月は九世團十郎追遠とあつて歌舞伎座に新古の十八番物が六つも並んだ。切りの踊りと準新作の土屋を除けば悉く古典の大物揃ひだ。上方俳優許りでやつた炬燵がよかつた。助六がスピードアップされた上、地方や舞臺の使ひ方に色々難があり乍ら、猶且つ羽、梅、幸の好トリオで本格的な面影を僅か乍ら寫してゐた事を多とする。その他は追遠と十八番物と云ふ特殊關係によつて、それ／＼印象に残るものである。

中座は曾我廻家、文樂座は若手連の抜擢興行、浪花座は

扇雀小太夫。

京都南座へは河合喜多村に映畫人が加はつて眞山氏の唐人お吉をだした。これは五月の歌舞伎座で松蔦のお吉壽三郎のハルリスで演じたと同じ物だ。

三月の末に到つて、かねて企劃中の罪會が成立して、愈々中座の舞臺で獨立興行を持つ事になつた。獨立とは云ふものゝ、これは全部大阪毎日新聞へ賣つた興行で、それに古典座の助演があつた。演し物は罪會としてはお夏清十郎五十年忌歌念佛の上と中。福、魁、壽の熱演が可なりに長いダレ場を救つてゐた事を認める。三優が協力して近松畑に復興の鍬を二度目に入れた目的はこれで達しられた譯だ。四月歌舞伎座は、あの豪華舞臺を利用してのレビューに、花時の月一杯を賣りきる盛況。

中座は新國劇の二部興行、國定忠治が當つて、これ又一ヶ月のロングラン。浪花座の新聲劇が餘り振はないのに比べて、一層この劇團の存在を力強く意識させられた。

角座には舊關西新派が映畫人と組んで一旗上げた。これが相當な人氣を占めたさうだ。

文樂座は紋下で問題がこちれて二部興行となつた。折角開演時間が短縮されて好都合だつたものが、これで又々元

へ逆戻りした形だ。併し一方で人形浄瑠璃保護案が議會を通過して、前途にある光明を點じた。演し物も古鞆のすし屋津の沼津と金看板を並べた外に、久米仙等と云ふ珍物もあつて物珍らしさに人氣は盛んだつた。

京都は青年歌舞伎と家庭劇で平凡、寶塚へは八重子田の助等でこれも特記するが程もない。中旬に前進座が朝日會館で忍び車のだんまりと街の入墨者で相變らず人氣を煽つた。

流行歌島の娘を取扱つた芝居が三つも大阪で演てゐる。五月歌舞伎座は東西の中堅所の二枚目女形を一堂に集めた花やかな顔ぶれで明けた。

今月の話題は初めて長期公演を持つた鼎會が中心にされた。涙の四つ辻は初演の時の魁車役に福助が廻り、我童役に魁車が収まつた。原作「溝を隔てし」の緊密性が時代と所を異にして色揚げされたもので、鼎會用新作としては過不足のないものであるが、いつ迄も三人等分の適役を目標に脚本を撰ぶのは考へ物だと思ふ。千兩幟で鐵ヶ嶽が鳴居を氣にしての周到な出入り、稻川の人形振り引込み、おとわの前垂れを使つた可笑味の引込み等、三優が三様に負けず劣らず苦心研究の態度を推稱しておきたい。その他では

壽美藏が文藝賞を貰つたとか云はれる富士山重保の出來榮え松蔦のお吉が河合のそれに比べていかにも明鳥のお吉らしさ等が殊に目に殘る。

文樂座は二部興行で古鞆が先月と同じく分の悪い畫の部を引うけて珍らしい岸姫を語つてゐる。この岸姫が浪花座の扇雀小太夫一座の二の替りに出て、期せずしてすりど舞臺との競演となつた、津の志渡寺は綱造の絃と共にきへががあり、土佐の十種香は文五郎の人形で渾然とした味があつた。

六月は思ひがけなくも歌舞伎座に十數年振りの菊五郎と鴈治郎の顔が合ひ、上半期、否恐らく本年中を通じて、これが最大の收穫となるのではあるまいかと思ふ。基盤太平記の岡平と云ふ無理な役でさへ、菊五郎の一と工夫で相當な息吹きを與へられた。その他の持役に到つては云はずもがなである。一と度菊五郎と同座した爲に、六月の歌舞伎座出演俳優一統は、いかに色んな刺戟を與へられた事であつたか、各々の精進振りが著しく目についたと云ふ事を特記しておきたい。文樂座は津太夫が抜けて従來通り的一部制となり、土佐と文五郎の絶品酒屋の外、古鞆が珍らしく宮守酒を語つた

昨夏珍らしい川連館を京都で語つて以來、古鞭は埋もれた古劇をしきりに復活して克明に研究上演してゐる。當の目標たる津太夫の存在や、俗流の人氣等と云ふものを度外視したかのやうに、一路かうした學究的とさへ思はれる酬ひの尠ない仕事に精進してゐる彼氏の態度を多としたい。
 中座は先月以來家庭劇の居据りで、相變らず清新味を發揮してゐる。アツサリした喜劇と、シンミリした新派物とをカクテルにしたやうなこの一座の特色は、曾我廼家と志賀廼家に向ふに廻して。歴史の淺いにも拘らず若い観客層に堅實な人氣を占めてきつゝある。
 浪花座に據つた雪州と直江は老巧な栗島に武田や汐見を加へて目先の變つた物を並べた。齣物でない大衆劇、バツドマンやジキルハイド等の目新しい物も結構ではあるが、當分この座組でやつて行くとすれば、汐見武田栗島等による新劇知のものも加へてほしい。この一座でも唐人お吉が出たが、この機會に上半期の上演戯曲を調べると、島の娘涙の四つ辻、唐人お吉が各々三回以上演じてゐる事になる。終りに上半期で目についた俳優の技藝に言及したいと思ふが、もう所定の紙數を超過してしまつたから次の機會を待つ事にする。

ケノンツト号



萬人愛好の 撰良車
 國産品中の完璧 是非御愛乗を

京都市三條通小橋西

株式会社 大澤商會

市内特約店ニアリ

おうむ石

(巻談天保白浪)

電庵

なに成田の山で出會つたと、

ト、電庵もちつと見る。

お、さうか御禁制の護摩木山へさうとも知らず立入つたを、山番人に見付けられ、あぶなく突出されやうとした、お前はあの時の君藏か、

小三郎

あなたが程よく扱つて、番人達に袖の下まで出して下すつた、そのお蔭で漸々お山を下つた御恩は決して忘れは致しません。

電庵

何の禮に及ぶものか、俺のやうな人間にも、たまにやそんな洒落氣もあらア、だが、そのお前が何だつてあんな所でどくろを巻いてゐなすつたんだ。

小三郎

爰は私の家でございます。

電庵

え、お前の家だと、ふり、それおやお前は延若と心中をした小三郎か。

小三郎

それをどうしてあなたが、

梨園隨筆

米の飯

高谷伸

熊野松風に米の飯——

といふ言葉があります。謡曲のうち、何度聞いても飽きないものを、毎日頂いてゐる米の飯に喩へたものであります。

福助魁車は大阪劇壇の米の飯といふ所ではありますまいか。

いくら御馳走でも米の飯ぬきのお茶ばかりでは、上方人の腹はふくれぬやうです。同時に、米の飯だけでは、どうも御馳走といはないやうに、今の人は贅澤になつてきました。この不景氣にお米の御飯が頂けたら上等だなどといふ謙讓な氣持

がだん／＼なくなるやうです。そこで、先月などはこの米の飯に、鴈治郎といふ鯛のお焼物に、菊五郎といふ初鰯のイキのい／＼所など、とり／＼にまぜた、二部興行といふ二の膳つきの大饗宴でした。

そこで今月は猿之助といふ鮪の肴で、申せばズケで一口召上がらうといふ寸法でせう。やはり米の飯とお天道様はついてゐます。

電庵 いや、つい先刻、ふつと噂に聞いたんだが、その延若は要凌にゐるか。

小三郎 ト、電庵も少し急ぎ込んで聞くいえ、この世には居りません。電庵 ふう、さうか。

小三郎 と、ちつとなる。

運か不運か私一人忠ひがけなく助けられ、今東世間へ顔も出せず知らぬ他國を諸所方々と流れ渡つて居りましたが、たつきに困つていつそのこと、勝手分つた自分の家へ實は盗みに這入りうと、

電庵 なに盗みに這入る。

小三郎 さう、さう思つて足場の上で更けるを待つて居りましたが、考へれば、考へるほど所詮私に大それた盗みなどは出来は致しません電庵 なアんだ、腹返えりか。

小三郎 大恩のある兩親へ、不孝を重ね敷きをかけ、まだその上に最愛しい女は我が手にかけて殺したも同然、その罪滅しにはお寺へ這入り出家得度を遂げやうと、漸り覺悟を極めまして、せめての名残りに

梨園隨筆

さて、どんな狂言をといふ段ですが、今度の猷立は、既に定まつてゐるのでから、今後の問題だと思ひます。

關西劇壇のためにと言へば、やはり福助魁車を中心に、壽三郎を加へた罪會か東京へ行つてゐる延若が歸つた時はといふ問題で、鴈治郎のことは、ちよつと床の間へ別に据えさせて貰ひます。

いよく、どんな御馳走となりますと、作者といふ板前の庖丁加減で一概には言はれませんが、鰹だ鮓だと、中央市場からトラツクの着くのを待たないで、一層その米の飯を中心に、ばら鮓か、五目飯は如何でせう。

さうも喩がたとへで食意地が張つていけません。抽象的な言葉離れて具體的に申しませう。

東京の俳優の加勢なしで、俳優中心でなく、狂言中心で見せること、その意味は通し狂言の尊重です。大阪にある御家狂言の面白さうなものを、多少手を入れてやること、明石の切捨や、研辰の原作といふ風のを、狂言で容を呼ぶやうにすることです。昔の作者は、通しものでもかなり山を拵へてゐますから何とか面白いものができるかと思ひます。

昨秋の龜山嶺なども面白かつたのに興行成績は面白くなく、潮れやうとする關西劇壇の足を引つばつたやうな形だつたやうですが、これは、やはり足でなく手を引つばつて欲しいものです。あの時も大演習、柿葦落しの翌月、秋晴れの好天氣、いけない條件ばかり揃つてゐたやうです。

近松の世話物の復活、或は改作これは既に試みられ成功してゐるものから

電座

一晩だけ、親の家で寝る心で、足場の上にはやすんでみたところで見ます。
盗人から坊主とは思ひ切つた早變りだ、したがお前が出家を遂げたから、死んだ娘、いや証若も浮ぶだらう。

ト、しんみりいふ、この時満六網雪洞を持ち、弊の穴から這ひ出す、小三郎驚き、顔をかくして逃げやうとするのを電座臨き足場の陰に隠れさす。

電座雪洞を叩き落し満六を帯にて縛り、風呂敷で顔を包み、足場の根方に縛りつける。

かうしてしまへば、何を云つても分りやしねえ、さうしてお前、これから何處へ行く了簡だ。

小三郎 藤澤の遊行寺に少々齋堂の坊さんがいますから、それをたよりにこれから直に参ります。

電座

ト、行きかける、
鳥渡待ちねえ、

ト、最前の金の中から若干を取出し、

梨園隨筆

くびく申しますまい。

時代物では、楠 昔 斬とか、先月文樂で出た対眞の玉取とかいふ變つたところが如何でせうか。

いつも繰りかへされるものにはやはりよい所は充分あるものですが、忠臣藏や勧進帳は毎年出る。寺子屋、盛綱、石切なまゝ上演目録が固定しては、年に一度か二年に一度、會社のおみやげ付の観劇客はともかく、眞の好劇家で毎月見やうといふ人、義理で毎月見ねばならない人には、つらい事にはなりますまいか。

御馳走をたべてゐて動脈硬化になるやうに、いくら名作でも上演脚本の固定は演劇動脈硬化の傾向ではありますまいか。

すこし血壓が高いやうです。

そこで考へると、やはり俳優中心より、脚本中心に、そして稀には通し物をと
いふ註文もできます。

昔と違つて、長いといつても興行時間は短縮されてゐます。それに、二部興行の一部でも、一番目中幕浄瑠璃二番目大切と、一幕づゝでも形式は替へられてゐるやうです。これも形式打破の上、局面一轉の工夫はないものでせうか。

景さの折柄御註文のまゝに、今度は考證だの理屈ぬきのたとへ話、お口にあはぬ素人料理のお笑ひ種です。

すばらしい

夏肌の魅力

日やけ止めに・白粉下に

クラブ美身クリーム





芝居註文帳

倉田啓明

貴需に應じて、關西各優に演じてもらひたい狂言の數々を註文してみる。これが「關西劇場振興」の一助となるかどうか豫知しないが、見物の一人として、是非一度見たいと考へてゐる狂言である。

久しく東京で氣を吐いてゐた延若が、近く歸阪すると聞く。そこでこの優に

「宿無團七時雨傘」

を見せてもらひたい。この芝居は嘗て同優も演じたものだが、久々でもう一度見たい長い狂言だから多少のカットは已むを得ないが、なるべく通しか、さもなければ巧くアレンジして見せてほしい。

鴈治郎に對する註文としては、いつぞやも本誌上に述べたとほり、この秋には、是非とも

「競伊勢物語」

の紀有常が見たいものだ。

これはそのむかし浪花座で、演じて以來、ちつとも出たことのない狂言だが、風趣豊けき時代物である。鴈治郎の有常に、故梅玉の小よし―たしかに、芝居だつた。

その後、私は帝劇で吉右衛門の有常に、故松助の小よし、故宗之助の信夫といふ配役で見たが、播磨家の有常は餘り感服しなかつた。まだ若かつ

たゝめにヒレがつかない憾があつた。小よし役も現在では病める中車を他にして、ちよつと寛めたいが、今秋には舞臺へ再起出来るほど輕快に赴いてゐるさうだから、まづ打つてつけの小よし役者だ。

次に、

「双蝶と曲輪日記」

即ち「引窓」も、もうやつてもいい頃だと思ふ。更に少し慾をいふと



洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ブウキ
 ハラス
 ベルモ
 キュラ
 ペーミ
 ジン
 滋養葡
 萄酒



發賣元
 横山商店

大阪市東區豊後町三番地
 電話(94) 一六六一
 三〇一三
 四六四九

「一條大藏卿」がある。これも久しく出ないやうだ。
 次に、「かなへ會」の福助魁車壽三郎への註文狂言だが、さしあたり一寸見當がつかないけれど、この三優いづれも器用な腕の持主で、何をや

ても相應にやりこなすだけそれだけまた、際立つた傑作に乏しいわけである。近松物なんかも適當には相違ないが、過般の「お夏清十郎」程度ではどうもあきたりない。だから「かなへ會」はさしあたり新人の新作からスタートを切

つた方がよくはあるまいか。それから自分の作のことを宣傳するのは可笑しいが、私の舊作に、「本朝玉昭君」といふのがある。
 これは大正十年の秋、帝劇で梅幸の八千代太夫幸四郎の鳥丸光廣卿、宗之助の大橋太夫

勘彌の學僧慶雲等の役割で上演した、慶長時代の繪巻物風の作である。
 「かなへ會」の研究劇には向かないが、この三優には彼つた狂言だ。
 私自身としては見たい気がする。

ぶぶ子言はしてワ

「イヤ、若君、菅秀才のお身がはりと云きかしたれば、潔う首さしのべ」

「ア、逃かくれもゐたさずに、ナ」

「につこりと笑つて」

源藏と松王、問ひつかたりつ、小太郎の健氣な最期に、千代、戸浪、幾千のけんぶつともらひ泣。

この愁嘆の正念場に、いんま身替りに死んだといふ嘆きの的小太郎役の延丸が、着物をきかへ、ブタイバナの延丸會御れん中のもとへ、やつてきて「こんちは大けに」

ペコンとあたまを下げる。

寫實をセイメイの鷹治郎と菊五郎、フト眼につくと、現在見物の前でピン

シャンとしてゐるからには、死んだとも不憫なとも言ふ氣にならず、後の臺詞もしごろもごろ。

「……。又早く招んで下さい」
「……。又早く招んで下さい」
懸命、俳優も、上ワの空ラで、しばりしてゐぬ。

歌舞伎座の千秋樂、小姓やよひの颯ツとひらいた金扇から、さす手ひく手がすつかり逆。

獅子の怒り毛もの凄く、はては花みちまで行つて、おまけにお添。蠶を侮もとは逆にあつて満場を威壓のさま文字通り入神の技。

身替座神はユーモアでありエロ所作ゆえ、奇想天外のそそりがあらうとの期待に反し、荷物の景物もなく、緞帳しづかにおりぬ。

六世キク、牡丹刷毛にて頬を叩きつ「あツしやア、根がはにかみやなものだからツイ……」

あの爰な、嘘つきめがツ。

同夜、男女藏が、各優の部屋へ、こくめいに別れの御挨拶。

「……。又早く招んで下さい」
フト顔を見ると、これはしたり予れと今夜同車して東京へかへる三津五郎なので、兩者キマリわるく、たがひにでれて「ヒヒヒ」

まだ肩あげの除れぬ成一、小鷹、政雀とて、いやモウニ夕筋細ではゆかぬ子役ごも、梅檀は嫩より何んとやら、金魚の糞のごとく、ぼつりくと團體になつて、かぶき座のぶぶガールのものとへ肩入れ、偶に遊業にでたら。

「幕ちかく、なると話をつた、みこみ」
「いつさくか、見當のつかぬ苗桔梗」
「ぶぶガール、たれのものにもしたくなし」

なんて、自作？他作？、なんにして、も、マセ、たつけ文。

ぶぶ子、敏苦茶の文をだしたり入れ

たり「やくしやはんから手紙くりやはつたし」後生だいに國寶あつかひ。

◆ 市川市藏、脂汗をタラ／＼流して、角帯、白たびすがたで秘藏の盆栽へ鉢をいれる。自然木ほごヒヨロ高い弟子の市昇。くの字になつてジョロで水を注ぐ機みにデボチンとデボチンがコッソンのペンヤンコになつてひき下がつた市昇。

「よほごデリケートな問題です、孰つちがワルイか、正面衝突の刹那を見たひとはないか」都合によつては、足ぐらゐは踏むでもかまはぬ氣か。

◆ 早稲田——八幡製鐵の合戦を春日原球場に見學して、九州から名古屋への遊業を大阪へ道草くつた壽三郎、橋三郎、霞仙、おくやま等のヤキユウセンシユ。銅像ほご焦げました、來月は甲子園で宮守の黒焼です、これは即、日灼けのシート、ソツクで……」

あのレツテルを、花子にみせたい。

相良、宇藤のミス、センニチが前號の本誌を一瞥。「いやんなつちやふわ褒家の犬であるまいし……」

「怒しけりやア、鬨斗つけて、こつちやから呈げまつさ」

金魚鉢のキヤブテンとして、羽振りを利用す、泉野浮身港女史をはじめ、一同ゾク／＼有卦に入つてゐるのに、容固、多寡背の御怒髪、ガラス天井から溝の側へ貫きて、みちゆくひとのあいやへ絡みつくさま昭和の対蹠。

かく、極度にお冠りの曲るには謂れがあらうと出雲へ訊き合す。

「ウチノウジゴニアラズ」

かうなると、ゼンマイの緩んだ人間か、よつぼぎ頭の悪い人でなくては、

◆ コノ謎は解けぬ。

屋嶋合戦の那須與市以上のホームランをうつて、大向ふをあツといはした

色男の家元、好男子の元祖のオホハシ

艶男さん、林檎ほご頬を染めた上野夜

脂悦とチン／＼鴨。

「お待たせいたしました、唯今からお

膳のフタをあけます、アナリ、おいでございしましたら、お茶椀とお箸と澤庵もつて、アタヒのそばまでおいでをねがひます。」

「そなひに、他人行儀に言はんと、コチの人、おまんまごツこのアツボしまへう、と言ふてんか」

なんて朝夕あまへる周知の如し、ソコデ、飯田さん、胸の重石のとれた氣

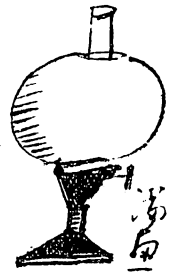
軽さ、さつそく大嶋の嶋司へ長文のデソボウ。

三原山へ蓋スナ、めい／＼ケロリと忘れて、金魚シートにツイテキル」

◆ 某映画館には、おめず臆せず、

「観客本位デー」のかんばんをあげてゐる。平日はさうでないやうにみえるから目立たぬやう、そと後見にとりこまさう？、ナンテ、東愛子も、ちよつと話せる。

星ケ城



覇氣と新鮮さ

桂田 曉 香

關西の劇界にはどう云ふものか新鮮さと云ふものが缺けて居るやうな氣がする。

之は一體何に原因するのでらうか、松竹の興行政策が悪いんだなど云ふ人もあるが、それなら東京はさうかと云ふに、關西に較べれば遙かに覇氣がある。

だとすると、松竹の興行政策ばかりの罪でもなさうである。と云つて、人物がないかと云ふに、相當何でもこなせる人が充分に居る。

では何が關西の劇界を毒して居るか、私は關西の劇界の人が東京の人達などに較べて、向上心がないからではないかと思ふ。およそ人間にとつて、向上心がなくなつた位いけないものは無い、向上心が無くなれば死んだも同然である。

俳優などに就いて見ても、あてがはれた役を、引受けて、それをうまくこなされさへすればいい、俳優自身が、進んで出て「あの狂言がやつて見たい、あの脚本をこなして見たい」な

い云ふ希望をどしどし興行者に申出る者が無いやうに見える。事實はどうか、其邊の事はつきり知らないが……。

今になつて考へて見ると、扇雀君の青年歌舞伎なご懐かしいものゝ一つで、坪井正直だの、山下秀一だの森澤靜江だの云ふ新しい人のものをぎんぐ世に紹介したゞけでも意義のある存在だつた。

長三郎君の五色座なごもさうなつたのか、たとへ興行上には損失をしても、俳優のためには非常なはげみとなり、劇界のためには之が大きい刺激となる。

壽三郎君の第一劇場などもさうである。

第一劇場として、興行上には失敗したかも知れないが、壽三郎君なり石河燕君なり、其他の人も、あの運動によつて、どれだけ益するところが多かつたか知れない。

或時私は石河燕君に、今迄一番愉快に仕事をした時は？と云ふ質問を發したら、それは第一劇場の時でした——と彼女は即

座に答へた。

之は云ふ迄もなく、彼女が、第一劇場によつていろ／＼と益した事を、無意識に物語つて居るものであると云つてよからう又豊田屋君にしても、あの劇團をやつた事によつて、彼の勢價があがりこそすれ、落ちたなど考へる人は誰もないであらう

實際關西の劇場には刺戟が無さすぎる。

話を成駒屋の一座の上にするが、此座など申分ない位内容に充實してゐる、文字通り歌舞伎の豪華版である。

だのに、どう云ふものか生氣が缺けてゐるやうな氣がしてならない。

これ位の座になれば、あんまり觀客に迎合する必要はない。

多少冒險であつても、思ふ通りのものを、どし／＼手がけて行つてい、此座も「藤十郎の戀」を初演した當時は潑刺たるものがあつた、それから後、どう云ふものかセンチシオンを捲起すやうな新作の上演をきかぬ。

福助魁車君など、何をやらしてもやれる人である。

この二人など、どん／＼新しいものに、手をつけて行つて貰ひたいものである。

一昨々年あたりの顔見世だつたと思ふかに出た大西さんの脚本でこの二人丈の芝居があつたが、あれなど非常に面白かつた大西さんなんか、どん／＼此二人のためにい、脚本を書いて與へて貰ひたいものである。

再び話を壽三郎君の上に戻すが、此人も現在のまゝには置かず、何かさしたい。

第一劇場を復活しろと云つたところで、いろ／＼と事情があるだらうから、無理と思ふが、此人などにも、どん／＼新しい脚本を與へて欲しい事である。

何でも松竹では、新進の作家に交渉をつけて、どん／＼此人達のものを上演すると云ふ事を、何かで見たが、それもどうやら、ちつとも實行されて居らぬ形である。

新人を登場させる事も意義のない事ではない。

それから扇雀君、此人を現在のまゝにして置く事は、危険と云つてよい、誰かよき指導者がついて、彼のいゝところを、成長さすにつとめて貰ひたいものである。

ところで、私は實に概念的な事ばかりを書いて來たが、與へられた題名の「關西劇場振興のため、この俳優にさせたい狂言と註文」の註文の方は、極手短かに、書きつらねて見たが、偕て「させたい狂言」となるとハタと困る。

何故困るか？、いゝものが無い。毎月随分多くの脚本が發表されるが、どうも之ならと云ふ脚本が無い。たとへあつたにしても、配役其他の關係で、上演出來なかつたりする場合も多からう。

さう考へて來ると、芝居と云ふものも却々六ヶ敷いものではある。(完)

續 街頭 拾

◆迷ひ子……

人の渦が巻く道頓堀や千日前で迷ひ子に出逢ふのは餘り珍らしい風景ではありませぬ。

迷ひ子を見ても、今までは軽い気持ちで遠くに眺めながら、通り過ぎた私も、自分に子供のできた此の頃では、人ごとのやうに放つておかれませぬので

「坊やお母ちゃんにはぐれたのか……どの邊ではぐれたのか覺へてへんか……」
優しくあやしながら聴かうとしますが子供は親を見失つた衝動で、體をふるはし、息をはづまして人混みの中に親を見出さうと、足も地につかね程、キョロ、と邊りを見廻して返事もしません。
歡樂地帯の事ですから、瞬く間に周圍は人の垣です。

その人垣を押しわけて、母親らしい人が子供に近づくなり、まるで氣の違つた人のやうに邊りもかまはずに、

「坊ん、かんにん、お母ちゃんが悪かつた堪忍してや……。」

と、我が子を抱きしめて、人混みの中も構はず、手放しに母親が泣くので、子供の方が泣き負けしたやうに、急に、ウウ……と鼻を吸りますと、廻りを取り巻いて眺めて居た人達の中に二人三人、クス／＼と笑ひ出すと、その横に立つて居た人が睨みつけて、

「何にが可笑しい……。」
きめつけられて、笑ひ出した人も此の一と言に、急に眞面目な顔つきになりました。

それを見た母親は、極り悪さうに子供をおぶつて、邊りの人達に軽くお辭儀をしつゝ去つて行くと、笑つた人も、怒つた人も、その後ろ姿を見送り、互ひの視線が合ふと、會釋をしあつて、右と左に別れて行きました。

◆人違ひ……

世間普通の人さまより、特徴のある顔と體を、御最負様の前へさらして、笑つて頂くのが私の商賣ですから、道を歩くのも可成り氣苦勞があります。

御最負のお人は、舞臺の私を見馴染ておゐるので、道ですれ違へば「アハ……。」と思ひ出し笑ひをしながらお通りになりますし、中には、いかにも話しかけるやうな素振りをなすつて、立ち止

りながら會釋をするお方も御座います。

更らに一步進んで『十吾ハン、此の間の芝居は……』と、馴れ／＼しくお話しかけになるお方もあります。

誰方様も家庭劇を御愛顧下さる大切なお方だと思ふと、不愛想な態度はできませんので、そのおかげに、ちよい／＼頭のさげぞこないをして飛んだ失敗をいたします。つい此の間の事ですが、私の歩く前方から、顔に微笑を含みながら見知らぬお方が近づいておいでになりました。私は心の裡で『おいでたな』

と、信じきつて、叮嚀に頭をさげますとその片側の家の窓から、
『○○さん、まあお這入り……』
と云ふ人聲……、その瞬間、あは——ツ亦失敗かと氣づくその時の暑苦しい感じなんとかこれを防ぐ良い方法はないものでせうか。

◆子供正直……

夜の十一時頃でした。

島の内の或る通り筋を上出な奥さんが半分居眠つてヒヨロ／＼して居る六七歳の可愛らしい坊ちゃんを伴れて歩いてゐましたが、急に立ち止まつて。

『お母ちゃん、僕おしツこがしたい……』と、云ひ出しました。

奥さんは困つた顔つきで、『お家へ歸るまで辛抱しなはれ……』『僕辛抱でけん……』

『そんなら此處へしなはれ、お母ちゃんが番をしてゐたげるよつてに……』

そして四つ角のポストの横に立つて東の方を見張つてゐますと、反對の西の辻から巡回の警官が出て來られて氣持ちよさ相に用をたしてゐる坊ちゃんの背後に立ちました。

坊つちやんは、泣くにも泣けないと云ふ恰好です。

すると警官は微笑をふくんで……
『坊やこんな處へ小便をしたら、學校で

落第をするよ……』

その聲に氣のついた奥さんは、びつくりして……。

『まあ坊や、なんでそんな處へおしつことをしなはるのや……』

と、警官の手前をつくらつて叱りますと坊つちやんは不平相に、

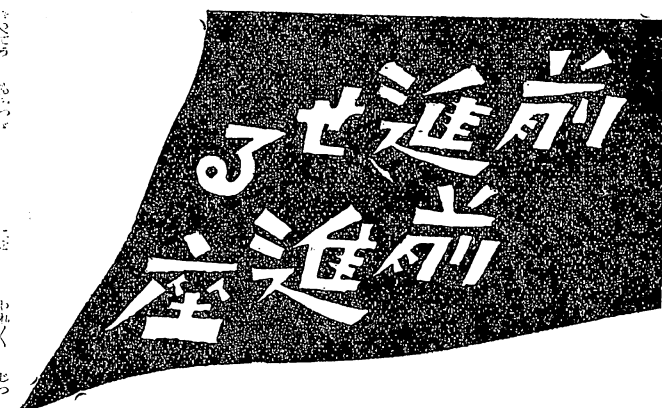
『お母ちゃん、此處へせいと云ふたんなやないか……』

奥さんは慌て／＼これツ……と制しました。が、モウ間に合ひませぬ。

警官は耻かし相にする奥さんと、心配相に澁面づくつてゐる坊つちやんの顔を等分に見くらべて、氣輕い言葉つきで……

『奥さん、子供は正直ですなあ、ハ、ハ、ハ、と笑ひ乍ら辭かな足ざりて去つて行かれました。

曾我 廼家 十吾



豊岡佐一郎

前進座は好意の持つる劇壇である。事實好意を持たれ、その好意の層をますます擴充しつゝある様だ。

しかし前進座はその好意に對して甘える事なく、それを精進の糧として前進してゐる事を、また長十郎翫右衛門を始め構成部員一同が、舞臺のみならず人間としても始終變らぬ間として快よく思ふ。

緊張を持續してゐる事を、我々は實に快よく思ふ。しかし我々は藝術に於ては、その心掛けや態度のみを全的に買ふわけに行かない。藝術的表現の優れたものを持たない限り、如何に、立派な態度心掛けも、その藝術の價値を高めざるわけにはいかない。むかしアセンズの公府は、鍛冶屋や大

工の素人芝居を御覽になつて、そのへた／＼とやる芝居を、寛仁大度には、その出来栄を買はないで、努力を買ふと仰有つたが、いつまでも意氣や熱を賣物にしてゐる事は、「鍛冶屋や大工」のする事で、藝術を生命とする者の恥づる處であるまさか現在の前進座がいまだにそれを表看板にしてゐるとは思はれないが、舞臺から挨拶する事など、もういゝ加減にやめでもらひたい。

今日では前進座の態度のよさはすでに認められた。今後は舞臺のよさに邁進すべきだ。舞臺のよさもたしかに認められつゝあるのだ。もう一歩だもう一歩すれば、そのよさが安定するのだ。

此際僕の私かに心配する事は、舞臺の演技に於て前進した前進座が上演戯曲に於て後退する事なきかと言ふ點である。上演戯曲の選定と言ふ事は、どの劇團に取つても第一の問題であるが、殊に前進座や新國劇にあつては、その選定の當否がたゞちにその存在權を脅す事になる。新國劇の今日の成功は俳優の働かせ方の巧みであつた事にもよるが、僕は、その上演脚本の選定が巧妙であつた事にその原因を歸するものだあそこは文藝部（演出部をも含めて）がしつかりしてゐる様だ。その點、前進座は残念だがまだ新國劇と比肩出来ぬ。東京ではいざ知らず、大阪の朝日會館で（僕は今日では芝居の観客としては大阪の方が進歩的だと思つてゐるのだ）「島

の娘」を出した事など、いかなる理由があらうとも僕は肯定出来ないのだ。前進座が最初の左翼的傾向を脱した事はむしろ正しい事として、今日の新大衆劇への航行がその針路を誤らなければ幸だと思つてゐる。

新大衆劇へ——大衆は與し易くして與し難いのだ。

こんどの出し物を見ると大衆文藝直移しで、しかし前派大衆文藝で——脚色の如何が重大問題だが——道頓堀へ初登場の前進座として甚だ朝氣に乏しく新鮮味を缺く、が大事を取つてゐるのかも知れない。或は前進座自己の發意でないかも知れない。「皇國の興廢」をかけた一戰ではないかも知れないが、今少し前進座の日頃の意氣壯なる處を此際その上演戯曲に於て見せて貰ひたかつた。「安中草三」は東京では相當好評を博したもので、何としても講釋物だし「旗本退屈男」も佐々木味津三氏（の作だと思つたが）のまだ腰の据らぬ頃の作だし、一讀した記憶では主人公が随分甘く書かれてゐた様に思ふ。残る處は「女の選んだ道」だが、姓名判斷ではないが、前進座に似合ひの芝居の様に思はれぬ。これが案外面白いものなのかも知れないが。

何だか賣物にケチをつけた様で心苦しいが、前進座關西公演には皆勤してゐる自分が、折角の道頓堀進出に、前進座もいよ／＼やつたな、と云ふ様な待望の心持の満たされぬのを淋しく思ふのだ。——前進せよ、前進座！

エキセハ特ニ陰囊疹ニ對シ専門的ニ研究ヲナシ多年臨床實驗ヲ經タル新藥ニシテ從來ノ此種製劑ト同一視セラレザラソコトヲ

陰囊疹治療新藥

EXE

エキセ

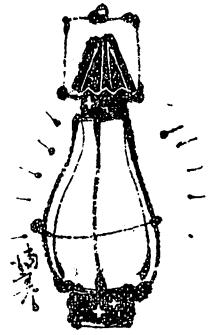
(無脂肪性溶液)

特色

無痛、無刺戟
奏効迅速

大阪市東區伏見町三丁目二七

發賣元 光榮商會



意氣を賞す

坪内士行

前進座の諸君よ。まづ云ひたい事を先へ云ふ。怒らずに仕舞まで聞いてくれ給へ。

諸君の宣傳は非常な努力で、常に感服してゐるが、大毎の前社長本山氏の葬式に、前進座のマーク入りで全員参列したと云ふのが本當なら、あれは失敗だと思ふ、少くとも僕はさう云ふ事は嫌ひだ。主義から云つても、方法から云つても、いゝ宣傳のやり方ではない。それからもう一つ、嘗ての放送の時、名古屋かの樂屋で、一同が扮装して稽古をしたと云ふのを、やはり宣傳として大々的に各新聞社のラヂオ版へ寫眞を送つたが、あれも失敗だと思ふ。元來俳優は創意的模倣者であるべきものだと思つてゐる。

「創意的模倣者」とは矛盾した言葉のやうに思はれやうが、藤十郎の言つた通り俳優は豫めの觀察や練習によつて、さまざまの模倣しうる多くの材料を蓄へておき、それを、作や場合に應じ、必要な聲調動作を速かにクリエートするのが俳優の任務だと云ひたいのである。

ところで、扮装したり、立つたり居たりして見なければラヂオの放送が出来ないと云ふのは、素人には許される事である、専門家としてはむしろ耻づべき事ではあるまいか、いや、それをやつて見るのは結構だ、決して斷然反對すべき事でないばかりか、それ程の熱心のあつるのは大賛成だが、併し、それはあくまで一座の内だけの事にしておくべきだと

信する。實際の話が、僕はあの寫眞を見た時に、素人團體の一人よがりの寫眞を見る様な氣がした。これまでは悪口。

それもこれも、君等一同が死んでも成功して見せるぞ、と云ふ意氣盛んなればこそ、やり過ぎでもあり、腕線でもあつたのだ、と、悪口は云ひながらも、感心はしてゐるのだ。アラを探せばまだいくらかも出て来る。俗劇「鳥の娘」をやるにさへも、何か一と理屈つけて逃げ途をこしらへてかゝる、など、云ふのも其の一つだが、併し、誰にしても君等の苦闘には同情してゐる。そこに君等の強味もあれば弱味もある。苦闘しないでもどうやらやつて行けさうになつた場合が問

題となるのだ。これはすでに長十郎君も
翫右衛門君も充分過ぎるほど知つてゐる
事であらう。今さら僕が云ふまでもない

が、さうなりつゝある現在、諸君の最も
意を注ぐべき點は三つに要約されると思
ふ。三つとは、甚だ定石的だが、第一は
腕を練る事、第二は作の選定、そして、
それと連關する事だが、第三には「主義」
問題の徹底的再檢である。

君等が眞劍なので、君等を語る場合、
自然こちら言葉がいやに固くなるが、
ぐつと碎いて云へば、君等にいゝ所も多
いが、まだぐつぐつと多い。下の諸
君も甚だ素人臭い。そこがいゝ所だ、な
どい座なりを云はれていゝ氣になつて
ゐてはいけない。下の諸君よ、奮勵せよ
だが、長十郎翫右衛門の兩君も、時々馬
鹿に長たらしい思入れをする事がある。
所謂「演出家」を持たない様に見える諸
君の事だから無理はないが、クローズ。

アップの映畫でも寫してゐるのかと思ふ
ほど間のびのする時がある。

これはホンの一例に過ぎないが、朝日
會館での「寺小屋」や「だんまり」でも
可成り見てゐてイラ／＼するほど齒がゆ
い所が多い宣傳も大事だが、是非技藝習
練の時間と「會議」とを充分に持つてく
れ給へ。

「主義」のことは、この雑誌には書けな
いが、生煮えなことは何によらず避けた
いものだ。

なまなか中途半ばな口實をつけるのは
物欲しさうでいけない、人の云ふ事の受
賣りや、外國輸入は清算して、大いに自
主的であり、且、獨創的である「主義」
を樹立して貰ひたい。

上演作品についてさまざまの云ひわけを
しながら本山大毎社長の葬儀に列したり
するから文句が云ひたくなるのだ。こい
つは一番考へて貰はふ。

作については、諸君の今までの物を全
部見てゐるわけでなし、今度上演の物も
殆どみな知らぬ物なので、何とも云へな
いが、僕の知つてゐる限りでは、一般受
けはどうであつたか知らぬが「馬」が劇
然優秀な出来であつた。

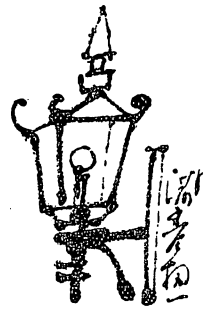
歌舞伎の若手には出来ぬし、築地でも
なし、新國劇よりもよく、一種獨特の妙
味を發見した。

あゝ云ふ分野を開拓して行けぬものだら
うか？

もつと云ひたいが、一寸ひまが無い。
諸君よ、どうか今までの意氣を持續し
て行つてくれ給へ。
ダレ切つた今の日本劇界に活を入れる
のは諸君である、

と、口先ばかりでなく本當に考へてゐ
る。至囁々々。

(一九三三・六二八)



前進座の道頓堀進出

入江來布

大先達の伊東俊雄さんから「河原崎長十郎君の前進座が道頓堀へ進出しましたよ」と聞いて、遽かに河原崎長十郎君が好きになり、前進座が好きになつたやうな氣持がした、「知に偏する」といふ言葉を、何だか偏頗なことで、不公平でもあるやうな場合に使ふけれど、人生、知に偏せずしてどうして眞の味ひに接する機會が出来やうぞと思ふ、況んや文藝とか芝居とか情味を以て本然とする藝術上に於ておやである、「知に偏する」とは、實質を知りもしないで、たゞ學閥を引張つたり、郷黨の蔓を手ぐつたり、請託を容れたりすることではない。

世間には公平だ〜と言つて居ながら本質を知りもしないで請託に動くものが随分ある、そんなのよりはあつさりと「知に偏する」方がよつぽど公平である。「知」とは少くもそのものを知つてゐる、知つてこれに近づき、これを味ふことは社會百般人生の上で寧ろ最も適切必要なことだ、況んや藝術に於ておや

である。伊東さんの紹介から、忽ちに長十郎君と前進座が好きになやうな氣が湧き上つて來たのは藝術希求上の必然の因縁だと思ふ。

その前進座が、所謂五座の櫓を並べた芝居の本場所道頓堀へ進出して來た、盛んである、いよ〜本格式である、併し、たゞそれだけで前途を祝福すべき歟、むつかしいところは茲に清む。

前進座は、劇壇革新の旗印を掲げて獨立した、主義主張のたゞめに情實をふりきつて蹶起した、併し、その成さんとするところは要するに芝居である、芝居をうつには舞臺が要り、見物が要る、即ち興行的効果を條件とせねばならぬ、専門劇的、つまり女人の芝居、も一つ通俗的に言へば職業演劇たらざるを得ない、理想を突張らうとすれば經營を如何せん、經營を完うせんとせば理想を如何せん、長十郎君は本もの、俳優であり、前進

座は専門劇團である、道楽仕事ではない、だけれども、少くとも前進座の如く、また長十郎君の如く、理想の出現を真正面の標的として駆起したものに経営のために理想の實現を犠牲にする事は身を切らるゝよりも辛からう、さればと言つていつまでも舞臺らしい舞臺で芝居のうてないことも又理想實現を犠牲にしてゐる以上に辛いことだ、悩みは茲にある、私が、前進座に對する今の好きさ、今の關心、今の「同病相憐」の眞情も實のところそこにある。

朝日會館から躍進して浪花座へ出たこと、これを以て直ちに前進座の理想は果してその幾分を實現した歟、経営上の伸長はたしかに實現した、見物層の進展は……、劇的實質の進展は……、それはこれからだ、いかに、それはこれからだから一層むつかしい。

浪花座の看板あげを觀た、一風かはつた面白い諷風だつた、賑やかで、またうちしづんだ所もあつた、名人圓朝の一本名の梅ヶ香、安中草三、田村正男氏の「女の選んだ道」佐々木味津三氏の「レビニュー化した旗本退屈男」みんな次ぎ〜に面白さうだ、まねきに書いてある通り、安中草三をはじめ、狂言のどれもが前進座諸君の血氣と任俠と明朗とを標示してゐるらしくも思はれる、そしてまた一道の「創造の孤獨」をも含んでゐるやうだ、同時に、斯ういふ直覺を感じた、それは「旗本退屈男」の主調を引のばして、前進座そのものの動向がレビニュー化して

反映した、もう一つは、往年の「澤正とその一黨」の或る時を思はせた、それは何ういふところに歟、一段の大衆化、もつと通俗的の言へば浪花座化した、それではあるまい歟。大衆化は、前進座旗上げの理想の一つであらう、併し大衆にもいろいろの解釋がある、浪花座化したる大衆、それと、前進座の本然目的たる大衆との照準をびつたり合はせる迄の苦心と努力、それが、これからの前進座の大仕事である。

松竹と妥協し、或ひは松竹のよき諒解を進めること、これもまた前進座目的遂行の一つであらう、併し、妥協諒解にもいろいろある、たゞの平凡なる新大衆劇、新家庭劇と化すること、いかに経営が樂になつても斷じて前進座の本旨ではあるまい、またそれならば何を求めて新しく長十郎君並びに前進座に埃たんやである、伊東さんが前進座の「知に偏する」のは、何かこゝに埃たざるを得ぬところがあるからであらう、私が急にかこゝに埃たざるを得ぬところがあるからであらう、私が急にか長十郎君と前進座に關心を覺え出したのも、そこに何かを埃たんとするからである、伊東さんや私たちの一二の人の問題ではない、現芝居の居道のため、また前進座の現存の所以のため、更に熱情優人河原崎長十郎君の奮起しつゝある所以のためにもこの「埃つある」がためではない歟。

道頓堀進出が絶好の機會と思つて、御祈言に代へたむだごとを記した。

若人が汗漉々と夏芝居

來布

さあ前進だ

— 鏡と語る —

中村翫右衛門

病をはね飛ばさう

朱ぬりの小さな鏡臺がズラリと並ぶ、それは私達が忘れる事の出来な
い思出の一つ。

昨年五月二十一日市村座と云ふ唯一つの根城を焼かれ、鏡臺は元より
何一つ出す事も出来ず、からうじて座旗一本を持出し、其の下に手をつ
なぎあつた私達が劇場難を踏み越えて、天幕小屋でもやつて行かうと更
生の意気に燃えた矢先、まづ必要な物として、後援者の方から寄附して
下さつた、前進座の柄に似合ぬ可愛い鏡臺。

それから一年何ヶ月、新橋演舞場に、名古屋に、朝日會館に
九州に、東北に、此の鏡臺を助手として、苦難の道を歩んで来た私達前
進座々員。

紋散らしの、部屋せましと見える大鏡臺、乗るともぐりさうな座布團
さうした歌舞伎生活とオサラバをつげた私達はこの小さな鏡から、白粉
のムラや、顔のキレイ・キタナサ、を教へてもらふに事足りてゐた。

めすむ劇樂

スンセンナ 爭議

股野啓三郎

★ 櫛ろしい様な世の中であるデス。日ごろは、お互に仲よく
仕合つとつても、トタンに糸變とか、心境の變化とかをする
世の中の流行になつたデス。
その流行に洩れては……テンデ商賣から、囃子鳴物聲色入
りで、松竹衆劇部のスターさまと、樂士さまがストライキを
やつたデス。

★ なかく、東芝のストライキなんて云つとれんほど、新聞
記者氏が、汗を流して、経営双方を、巧に、ツンガイ？させ
て廻つたデス。

荷造りを仕様として私はこの小さな鏡とむかひあつた。頬は亦少し落ちて、眼はくぼんで、心持ちやつれが眼立つ。

前進座と云ふ集團の種々な條件を少しもおかされる事がなく道頓堀進出の發展とまでなつたのは確に幾らかでも、前進座の力が強くなつた事を意味すると思つた、然しまだ先尙はるかに道遠し、私達の苦難は是からだ、さう皆んなで、ネヂをしめあふ矢先、私は健康を少し損ねた「大阪へ行くのは無理だ」と醫師の注意、晴天の霹靂、遂先日、座員の龜松が三ヶ月間の入院で、座員全體の力で漸く、仲康を取戻して来たばかりの所、今度は私が……、私は絶対に出演しない譯にはいかない、何んとかして治してくれと必死に頼んだ。座員の温い言葉が私のぢりぢりする氣持をおさへる「舞臺が大切だから、イラ／＼せず、養生して、ゆつくり出て來給へ。外の用事は、全員で埋める一寸も心配いらぬから……。

大分工合は好いが、セキが止まない、立廻りはいけないと云ふが、そんな事を云つてはゐられない、倒れて後止むだ。

身體中が熱くなつてぢつとしてゐられない。何んの意味だか、鏡と一寸、にらめつくらをして、私は行李の中へしまつた。

さあ明朝は出發だ。前進座と云ふ組織の力は、龜松の健康を取戻した。この位の病氣等何んのそのだ。

負おしみではない、空元氣ではない、充分に自重して、道頓堀進出を成功させなければならぬ。——さあ元氣よく前進だ。

★ 火事と噂は大きいほどオモロイ……これ／＼、他人の苦しみを、さう云ふてはないデスツ。さて、この暗暁……イヤストライキですかナ……これは、何りも、ノツケから、大義明分の無い戦ひ、ハッキリ云へば、争議團に、歩のない合戦だつたデス。勿論、歩があれば、あれまでコジれずに、濟んだであらうデス。何？歩のない將棋はまけ將棋……アツさるか。

★ ヤツガレ、つらく観戦するに、大義争議團のヒメギミ達、何うやら、樂一さまたちに、誘はれて、誘ふ水あれば、いなんと思つたのが、木の頭であつたらしいデス。これぢや、ガク／＼なら娘をやるかーとも云へんデスツ。

★ 談話休憩……同じ女性ではあらせられても、紡績工同盟のゴ女氏は、頗る密緻的に矢鏡で、フアイチング・スピリットを多分に持ち、堂々と勝負を物語るデスガ、我が樂劇部の飛目明子女士……敢て女史と云ふです。ウヘヘ……は、争議第二日目、歌舞伎座の梅町でパツタリ出會つた筆者の質問に「あゝら困つたりてな面持ち……あれは彼の人の特チヨウださうですが……で云つたデス。「ワテ一人に聞かはずかたか、何にも云はれへんやない」とネ。これで、樂劇部のアツパレ第一線の部下だから、少々おそれるデス。テヘラ／＼

★ 松竹衣裳部三階で、筆資代表會見の際、指邊團體の〇君が會社代表篠山克己之守に聞いたデス

「若し争議團の要求が容れられれば、それは全松竹十國の

葉	言	の	者	作
---	---	---	---	---

幻浦島

に就て

木村富子

歌舞伎座の七月興行に拙作の「幻浦島」が上演される事に成りました。これは昭和四年十二月に、東京歌舞伎座の中幕に書きおろしましたのが初演で、今度は二度目に成りますが、主役浦島は矢張り初演通りの猿之助氏で、家橋氏の乙姫が今度は時藏氏に成つて居ります。

浦島の舞踊と申せば、以前は長唄の「和田の原」に限つてゐるやうで

「從業員に適要されますか？」

「モチ、そのつもりで協議をしようぢやねえか？」

「そやさない、叔事が長ひくねやがな」

シヨクン、此の間答から何を汲みとるデスカ？ 要するに「最初の筆談人員約三十四五名の男女が、優秀な筆談條件を獲得したら、あとの人は地獄へ行かうとマ、ヨ」となるぢやないデスカ。斯く想像した筆者は、心中ひそかに「こんなペラペラな筆談競争があるもんか。こんなもんとは知らなんだ。知らなんだ」とネ。

★ だから、少々ケツタクソ悪く考へて、同じ女性闘士、瀧すみ子女史に云つて見たデスカ「こんなムツカシイ話は、あつ苦してやつちよれん。それよか、あなたの結婚は何時や聞かしてんか」が、瀧女史はニヤリとした切りで俯向いたです。何やら、家庭の主婦となる日が待ち遠いらしいデスカ。かるが故に舞臺を捨てた！あゝさよか。

★ ストライキ第二日、日本橋クラブの二階、すなはち半議本部は、競争風景にしては華やかすぎる、お花畑の如く賑めかしくも、香気フクイクたるものだったデスカ。が壁にもたれたスター××子くんが、隠ひぎを立て、勇取にもイト派手やかにタクシ上げたスカートの中には……うわア、これがノンスロなら發聲禁止の絶景だア。

★ かと見れば、まん中あたりには、瀧すみ、飛鳥の兩姉御が、ごろり肘まくらで、アンパンをバクついている形景、こんな處を、レヴェニューアンの異性に見られたら、トタンに彼女の

したが、近年に成りまして坪内先生の「新曲浦島」「長生新浦島」など結構なものがあるに出来て居りますとからまことに拙い思ひつきでは御座います、風俗も樂器もすべて日本好みで、洋楽を少しも加へずに歌劇やうのものを作り上げましたのが、幸ひに初演當時、各新聞雑誌の劇評其の他先輩諸氏から、身にあまる褒めの詞を頂きました、私にとりましては幼稚ながらも會心の作とでも申しませうか。

只一つ心配な點は、わづか五年の間ながら、レビュ一といふものが盛んに成りました今日らかへりか見ますと、龍宮の段で、魚族の群舞の件に、洋舞のやうな統一のとれた輕い演出が難しからうと思はれますだけで……それともう一つ、今度は一番目に、同じ俳優の俊寛が出来ますだけに、最後の光景がそれとつく嫌ひがあります事で、勿論猿之助氏の勝れた演出は、其の當時すでに定計のありましたものだけに再演となりましては更に幾多の工風も積まれて、必ず花も實もある舞臺をお目につけられる事と信じて居ります。



人氣が、百パーセント消滅する事ウケ合ひ。木石の如き筆者……さうでもない……これ、ませつかへしやいけんデス……すらもが、まことに甚だ残念無念にも、百年の戀情たち處に雲散霧消するにも似た好滅の悲哀とかを體驗したデスゾ。

★ 爭議半ばにして、彼女らは、千年の靈場高野の山に御臺籠城とシヤレたです。よろこんだのは、世の悪性男ども、大阪の町でも、かう大勢揃ふた案のまゝの生き滅天はんは見られへんで……とばかり「刈萱桑門築柴棘」を逆に、男が女の尻追うてワンサ〜。

★ おかげで？ 儲けたのは、南海電車と、高野のお寺ではあつたが、古来女人禁制ちやと大帥が仰せ出された天下の大霊場しかもモランガエルとかを自負するオベチヨコ娘……これは失敬……が大暴群をなし、徒黨を組んで押し出したから大變たうとうあの大山火事をやらかしてしまつた。

★ そもそも高野の山へは、吾師弘法大帥の母人が訪ねられた時に火の雨が降り、下つて後世には、彼の人間の天ぶら氏、石川五右衛門が、大帥廟の八葉金作りの蓮華を一葉失竊した際にも火の雨がガゼン降り出したと、物の本に書いてるデス。

★ かゝるアラタカなる靈場を、猛後に焼かんとした事……こゝんとこ、勸進帳もときで書いてるデス……まことに恐れあり、かほどの罪業を重ねレレゾユ一娘を女房に侍たば、たち處に身代限りをなし、四百四病に惱まんこと必定なり。夢々疑ひあるべからず……てなもんや、ないか〜。



猿之助の人間俊寛

本山 萩舟

「平家女護島」の俊寛、は久しく打絶えてゐたのを、猿之助の父段四郎が、やはり故人の雀右衛門と共に復活して好評を得たところから、その後ちよいと出るやうになり現に吉右衛門が得意にしてゐる。

この狂言だと猿之助は、妹尾の方へ廻されさうだが、そこで新しい方の俊寛を覘つたのかも知れぬ。いづれにしても二代の俊寛役者であるとはいへる。

新しい方の俊寛は、左團次も手にかけて好評を博した。法成寺の執行僧で、鹿ヶ谷評定の首謀者、相國入道の憎しみが最も深かつたといはれるだけ、どこかにそんな貫録があつたらうと思はれる俊寛としてなら、左團次の柄にもはまるわけである。餓鬼道に墮ちた島の俊寛にも、さうした人柄の名残が必要としたら、左團次の演出にも首肯けると

ころが多かつたと記憶する。

飢渴と絶望とに、心身憔悴し盡した、生ける屍を文字通りの流人、現實の生活を主として、繊細な心理描寫を見せるには、今のところ吉右衛門は最もはまり役である。動きと形とを主として、人形に表現させる院本の俊寛が、老熟した段四郎の技藝によつて、復活されたのにも無理はないそれにはまた雀右衛門の人形味に優れた技巧が、場面を引立てるに與つて力あつたことは、今なほその面影が、髣髴として玄に立つのでもわかる。

さて猿之助の俊寛は、どう評したらいいことになるか。近松物の『女護島』だと、妹尾の方へ廻されさうだといつたのは、あのガツチリとした體格と、それに伴ふ根強さがあつて、しかも明るくて陰影のない、いはゞ竹を割つた

やうな藝風が、一徹果敢な妹尾のやうな役に、打ツてつけどと思はれるからである。無論それは院本の役どころにいて、多分に近代味の盛られた、新しい方の俊寛となる、おのづから條件が異ツて来る。

一時代前の新人といはれた左團次のあとを、次の時代の新人といはれ、みづからも任じてゐるらしい猿之助が、追ツてゐるわけである。柄も素質も藝風も、また脚本に對する解釋、演出等、すべてにおいて左團次と猿之助とは、むしろ違ひ過ぎる位違ツて居り、同時にまたその間には、及ばぬ點も優れた點もあることはいふまでもない。がたゞ一脈通するところは、時の多くの觀客心理に、最も近い神經を有ツてゐることである。以下左團次とは切離して、主題である猿之助の俊寛を檢討する。

長身でなく小肥りな健康體、さう考へても瘦せさらばうて、餓鬼道に彷徨する流瀆生活者の弱き、痛々しさといふものは、現はれさうに思はれないが、たゞあの通ツた鼻筋で、これを救ふことができる。扮装は相當に巧い人である、どうにかシガは隠せたと記憶する。

精神と交遊する貴族僧、いくら沈淪落魄しても、その面影はあるべきだといふやうなことは、今の觀客の多くは考へない。この點でも猿之助は幸福である。膽汁質のやうに見える、末梢神經は鋭く働くと近代人、演者の末梢神經と

多くの觀客の末梢神經とが、舞臺へ觀覽席との間で、相觸れ、相合して閃光を發する。猿之助の今の人氣は、恐らくこゝから湧出したものと見て差支へあるまい。

成れの果の僧都俊寛よりも、人間俊寛であることである。甲も呂も利く自由な調子の持主、舞踊で鍛へたりズミカルな動作、これ等がすべていゝ條件になツて、舞臺に一種の霧氣を醸成するのが、やゝ單調で、かなり長い丁場を持つたへる上の滋養藥となる。

そして漸次終局に、同時に高調に達した時、人間俊寛の間から、人間猿之助の本體が、現はれる氣遣ひの有無によツて、この役の成敗はきまることにならう。

末梢神經は誰にでも共通するだけ、繊細に演ずれば演ずるほど。

自分が出なければ類型的になる。俊寛も光善も同じになり易い。なツてはならぬと思ふから、馬力をかけるとつい自分になる。なりたがる。

そこをジツくりと抑へて、個性の根幹を打建て、發揮しやうとするには、末梢神經以上の、もツと大きな力を肌の下に蓄へねばならぬ。

猿之助にその蓄へがないといふのではない。

今が蓄積修養中であらうと思はれるだけに、一種の試験臺として、遙かに今度の俊寛役を驍戦する。



俊寛の實説

瀬川春江

今回猿之助に依つて上演せられる俊寛は、在來の平家女護島に新釋を加へしものにて、倉田百三氏の創作になるものだが、自體此俊寛の實説については、新古書にその説幾多ありて、餘り信を置く事を得の說少し。

此の俊寛は木寺法印寛雅の一子にして、法勝寺の執行たりき、その山莊京都東山鹿谷にあり、治承年中俊寛平家の專横をにくみて、密に是れを滅さんと常に謀議をめぐらしたり新大納言藤原成親、平判官康頼、丹波少將成經(成親の一子)多田藏人源行綱等その主なる一味にて、此の山莊に會合し種々謀をなしたりき。

然るに當時平氏の勢盛にして、容易其事成就すすべもなかりき、ましてや平家の柱石重盛いまだにありし頃とて

一味の者の苦心も又察するに餘りありと思ふ、同志の中なる多田の行綱早くも此の點に眼をつけ、一夜入道相國清盛が館なる西八條に至り、俊寛の照事を密告なしたり、清盛大いに驚き、且つ怒り、家人を呼び寄せその召捕方を命じたりき、一夜にしてその勢六七千騎に及びしが、清盛先づ下知して成親を招きて召捕り、備前に流し俊寛成經康頼三人を擲捕りて薩摩瀧なる鬼界ヶ島に流せり。

抑も鬼界は十二の群島より成りて、五島七島と名付けたりされば五島の内なる千戸の島に康頼をば捨て、成經をば奥七島の内なる三の迫の北硫黄島に流し、俊寛をば白石の島に捨てたり、此の島には白鷺多く石白きゆゑにかくぞ名付けし物ならん、此島々へは常に船は通はず、島には人稀れなり、そ

の人間たるや衣裳なければ本州の人には似もやらず、詞通ぜず身には毛長くして色黒く、食する物なければたゞ殺生をのみ業とす、されども成經の舅たる平の教盛の領地たる、肥前國廣瀬の庄より常に衣食を送りければ、是れにて俊寛康頼も共々幸も命をつなぎ居れり、因に康頼は此の以前、島流しの砌り周防室積にて出家し法名を性照といへり。

かくて治承二年に至りて、流人を召返すの評議あり、成經の舅教盛此事を重盛に語る、重盛やがて清盛に面會なし、理を盡して物語れば、康頼成經の兩人は許さんも俊寛一人はいかにしても聞入れず、彼れ入道の口入を以て人となりたる者なれば、清盛の怒りある道理なきにもあらず、重盛も詮方つきその儘歸邸なしたりき、されど兩人赦免とあるや直に清盛自書にて赦文を興へ、使として丹左衛門尉基康が命ぜられ、日夜急ぎて七月下旬出航なし九月二十日頃に鬼界ヶ島に到着なしたり、基康急ぎ船より上り、平判官康頼、入道丹波少將に赦免之書面を讀すに、獨り俊寛のみその名を認めず、そのわけいかにと聞きたゞせば、基康申すやう今度は二人のみの赦免なりと、聞く俊寛のなげきは大方ならず、基康心を察しやり又の時を見て赦免再願の勞を取らん事を約し、成經は夜の衾、康頼は法華經一部を紀念として、すがる俊寛を振り切りつひに出船なしたりき、俊寛思ひに堪へかねて、見せばやな我をおもはん友もかな、いろのとまやの柴の庵

を——と詠じたり。

爰に俊寛都に有りし時、召使ひたる者の中に龜王有王丸といへる童ありき、今日流人の都入りと聞きて、鳥羽まで出迎ひしが其の姿を見る事を得ず、俊寛の娘奈良に忍びをるを知りて、その所に尋ね行き其の娘の文を受け、父母にも物語らず治承三年三月の末都を出發なし、海路を凌ぎ薩摩瀨へ渡り、商人船にて鬼界ヶ島に着船なしたり。

有王丸着島の上、諸所をさがせど俊寛の姿を見る事を得ず折ふし髪はそらさまに生あがり、着たる物は絹布の分も見えず、やせ衰へる者に行きあへり、有王見付近づき見るに正し尋ぬる俊寛にて、互にそれと知るや手を取り足のふみ所さへ知らぬ思ひにて、暫は嬉し涙に暮れたりき。

それより二十三日を経し後、數年の衰へにて庵の内に於て遂に死去なしたり、年三十七歳なりき、有王は空しき死骸に取りつき心の行く程泣きけるが、庵の四圍に松の枯枝等を集め、是れに火をかけて一片の烟となしぬ、たゞ白骨を拾ひ忍びて都へ歸り息女に面會なし、有りし事どもを物語り涙に暮れたるも道理ならん。娘は悲しみて年十二歳にして、奈良の法華寺に至り尼とぞなりたりき、又有王は俊寛の白骨を高野山奥の院に納め、蓮華谷にて遂に法師と成りたり。

此の俊寛に種々浮説を加へ傳ふれども皆世上の虚談にて、殊に人丸の如き人物の出場は、誤傳も甚だしき物なり。



阿波の夕霧に就て

林 鼓 浪

徳島に於ける夕霧の墓所は大瀧山といふ山の麓の本行寺に在る。是れが日蓮宗の寺で今から考へると明治二十七年頃の日清戦争の最中に私は祖母に連れられて寺でお題目をあげ出征兵士の武運長久を祈つた其時夕霧さんをお詣りすると祖母に始めて教へられたが夕霧とはさも深い縁故のある人のやうに祖母は香華を手向けて拜んでゐた。私が歌舞伎に親しむやうになり廓文章の吉田屋に於ける襦袢姿の美しい夕霧を見るにつけあまりにお慕が粗末であることを痛感した。

明治三十二年頃に近松の夕霧阿波の鳴門を始めて霞亭氏が脚色したのを鴈治郎が上演したことがある。偶然中座でこの狂言を観劇した時、故人になつた先代の末廣家。霞仙が扮した平岡左近である。これが阿波の藩士といふだけにどれくらゐ私の感興を唆つたか。それ以来阿波の夕霧の墓と言へば全く劇中の夕霧其人の墓碑であるが如くに研究を續けてみた。それも随分久しい間で徳島藩で平岡といふ姓の人があると直ちにこれが平岡左近の子孫でないかといふくらゐに私は考證癖が募つてきた。無論近松が創造した人物に違ひはないが其當時は國産としての阿波藍が各國に販路を擴げて藍商人の最も旺盛な時代に在つたわけによく廓で耽溺したものだ平岡左近とは祖母の話では實は阿波の藩士稲田雅樂といふ

旗本退屈男

(をうむ石)

主水之介 ウフ、、陰に籠つた事を申し居る唄、シラフで居れば喧嘩したがるとは近頃變つた謙のかけ方ぢや、では何かな構取りの三公とか申すそちらの奴は酒を吞ますと、おとなしくなると云ふのだな。

呑んだの權 えへッ、と云ふ譯でもねえんですが、折角お止め下さつたんですから殿様があるなくなつてからすぐに又喧嘩になつては殿様の方で寝醒が悪からうと親切に申上げて見ただけで、イエ、それも澤山は要らねえんで、ホンの五合僅か五合はひを唄がせりや結構長くなるんですよ
へイ、結構樂にね。

主水之介 ウフ、、なか／＼味な謙をかける奴ぢや、酒で長くなるとは、どせうの様な奴上唄、いやよい／＼五合程で見事に長くなるかとあればどせうにしてやらぬものでもないが、それにしても喧嘩の元その宮は何處に居るのぢや。

呑んだの權 それは……あれ！居ねえぞ／＼三三三のすらかつちまつたぜ、

人で大阪の留守居役勤務中夕霧と馴染を重ねて遂に根引して妾となし阿波へ連れて歸つて圍つてゐたといふ其稲田は二千石の中老であつたらしいさうなると假令平岡左近と名稱が變つてゐても近松の作意と略適合するやうで興味は次第に繋つて往つたが爰に問題とせなければならぬのは劇に脚色された大阪新町の夕霧である。これが延寶六年正月に二十七歳で病歿してゐる。阿波の夕霧は寶永八年四月に歿してゐる全然年代が懸離れてゐる。然し遺憾な事には阿波の夕霧は大阪の夕霧のやうに資料やこれを信頼さす文献が乏しいので今の處單に傳説の夕霧としか取り扱へない想ふに阿波の夕霧は稲田が連れて戻つた妾の前身をさも夕霧であるが如く吹聴してゐたのかも知れぬ或はまた二代の夕霧ではなからうか。祖母の話に據ると夕霧は稲田との間に三人の子があり末の娘が加藤十郎左衛門といふ二百五十石の組土の家へ嫁入したので萬延元年に寂光智山慧照靈尼とある即ち夕霧の百五十年忌を供養した加藤家の子孫にあたる助之丞といふ人が先祖が夕霧の娘を妻にした縁故で即ち母の爲に年忌を吊ふたさうで。居室は大工町の二丁目目で槽家といふ姓に變つてゐたといふ。後に北海道へ移住した事とまた一説雅樂とあるのは稲田勘解由であるらしい事も聞かされ其邸が徳島本町裏で在つたといふ。既に祖母が亡くなつて三十五年にもなるので生前もつと追究して置けばよかつたにと今になつてはもう取り返しがつかない。

元祿頃には島原の一文字屋に夕霧が在り又二代の夕霧が阿波で晩年終つたとして其人が假に二代を襲名するにしても二十七八から以上の年齢になる最う盛りを過ぎた姥櫻で太夫としての全盛はどうであらうか。

若し二代とするや肝腎の大阪の方で調査せねば確な發表は出来ない。私としては阿波の夕霧は別個の存在として更に研究をしてみやうと思つてゐる。(終)

いゝ極鳥たつたにな、お前えかあんまり荒つばい眞似をするんで磨を漬して逃げちまつたぜ。

主水之介 ワハ、客を前にして草角力の稽古を致せば大概の者は逃げ出すわ、しかし極鳥とか申す客は何んぢや。

この話の間三公はきまり悪げにもぢくしてゐる、音楽が變る呑んだの權 どんなんも、こんなんもねえんですよ、十七、八のおボコでね、それが赤い顔をしてアノモウし馬方さん身延のお山へはまだ遠うんんせうか、と袂をくねくさせ乍ら、やさしく云はれてごらんなさへ、油の乗り方が違ひますあ、三公もあつしもつい氣が立つて腕にかけても、と云ふ様な事になつたんで、エヘ、それにしても三的は酒の氣かねえとちぎに又荒れ出すんでアレ、そろゝ荒れ出しさうだ、ちよつくらどせうにして下さいませね。

主水之介 致して遣さう、面白奴等ぢや、身共も一緒にどせうにならう故馬を引いてついて參れ。

兩人 エッ！……。

猿之助に演せたい役

森 ぼ の ぼ

小太夫の新興座と扇雀一座の合同劇は、クロウトのシバキも、シロウトの劇劇も、餘りパツトしない京阪に在つて、一ばん私の觀劇慾をそゝるものだが、それに似て而もスケールのより大きいのが今度の福助、魁車、壽三郎の西組と猿之助、訥子、時藏等の東組との握手である。従つてそれに一ばん期待を掛けてゐる。

今度の狂言の中、「俊寛」が選ばれたのは何より嬉しい。これは倉田氏の作品中でも一ばん優れたものである。恐らくこのくらゐ力強い演出を必要とするシバキは勤いと思ふ。それだけ役者の方に手ごたへのある、やり映えのするシバキである。

「遠山櫻天保日記」は先代左團次に書けられたもので、今の左團次も再三上演して評判が好かつたが、近頃は猿之助の方が度々演つてゐる。

當時のピストル強盗、清水定吉を題材に其水氏が書き替へたので、映畫的に場面の變化が多く、演り様でスピードアップ出来るし、ギャング流行の今日だけ、見物に興味を感じさせる點が多いだらう。ピストル強盗清水定吉を劇化したものに木村錦花氏作のものもある、前者ほど賑かではないが、迫真力はこの方が多い。それだけに、今の若い見物にはピッタリ来るかと思ふ。猿之助といひ、訥子といひ、何を演らせても、相當にコナシ得る優達であ

る。今述べた錦花氏作のピストル強盗の狂言などこの二人で面白く見物することが出来た。猿之助の定吉の不氣味さ、訥子の若旦那上りの俄泥棒のユイモア、その對照が面白かつた。猿之助が演つた物の中では「ABC忠臣藏」(忠義)のキラも好い出来だつた。(尤もこの頃はよく老役に成功する)。「太十」の光秀は柄が無いので褒められなかつたが、「扇屋熊谷」の姉輪ノ平次や「定助權八」を演らせてみたら、かなり面白からうと思はれる。新作では長谷川氏物の「暗闇の丑松」や額田氏の「山本勘助」などどうであらう。舞踊は在來の所作事よりも、新作の方に興味が多い。能から採つた「角田川」や「日本武尊」の火焔の亂舞などもう一度観たい。外國物で「月の出」の小泥棒等演らせて欲しいものも一つである。(以上は興行價値を考慮して挙げたので、春秋座公演の場合にはもつと深刻な、藝術至上主義的な物を選んでいゝと思ふ。而してその春秋座の復活を希望する。)



中井哲氏

を偲ぶ

— 順席不同 —

俵藤 丈夫

「日ごろ、セリフ暗記方の良い點に於て、久松さんと共に新國劇の双壁であつた中井さんが、五月末「戊辰維新」の稽古の時「どうも覚えられぬ、あたまにはいらん」などと云つてゐたが、六月一日の御園座の初日には、珍らしくプロンプターを附けたりしてゐた。いま思ふと、その頃から中井さんの頭腦に何かの變光があつたのではあるまいか。

御園座の二の替り初日の夜の「月形半平太」の持役一文字國重など、聲調の弱いいつもの中井さんに似ず、座員たちがびつくりして眼を見張るほどの熱演であつたが、或ひは、三條河原

のあの「死ぬ、死ぬ、憎い武士め、すたくに斬られて死ぬ」と絶叫した力演が、こんどの卒倒の近因ではなかつたかと思はれぬでもない。

——丁度六月九日の夜の十一時「中井さんが舞臺裏で卒倒した」と聞いて、計らずも一緒にゐた倉矢博士（内科黒田病院長）と外科の荒川醫師（共に新國劇後援會の幹事で、偶々來名中の長谷川伸氏歡迎會の席場にゐられた）の二人を頼んで、私が駈つけた時、もう中井さんは何の意識もなかつた。半平太に扮した辰巳君が、中井さんの門生たちと「大變だ、大變だ」と云ひながら介抱してゐた。まつたく大變事の突發であつた。病名は腦溢血と診斷された。

「中井さん！〜」と呼んだ私の聲が開えたのかどうか、かすかに眼を開いて頸を傾けたのみで、何一つ聞くことも云ふことも出来なかつた顔も、手も足も、刻々と冷えてゆくばかり、直ぐ、醫大病院長勝沼博士の來診を乞ふた。

「明朝（十日）まではむづかしいかも知れぬ。家族、親類の人々には即刻知らせるやうにこのことであつた。豊橋から、中井さんの長兄や次兄順次氏夫人が駈つけて見えた。東京からきぬえ夫人が、翌日の燕で飛んで見えた。それまでには黒田博士にも來てもらつて、出來得る限りの用心をしてゐたが、しかし「絶動かしてはならぬ」とよりほかに施しやうのない病氣であつた。意識不明のまま、昏々として眠ること滿三日、手に手を盡した名醫の治療も、家族、親類の人々、全座員不眠不休の看護も、効はなく、十二日午後十時十八分——私たちはその前、腕終間近と聞いて最後の永別を終つて後も、なほ、萬に一つの奇蹟を頼みに、最後の最後まで回復を祈つてゐたのであつたが、その甲斐もなく、——中井さんは、たうとう四十九歳を二期とし、澤田座長のとを追つて他界したのである。

伊藤が、その戰場たる舞臺に倒れて樂屋に死す——武士の戰場に於ける討死に等しく、何と

美事な名譽であらう。而も戦友たる座員たちに見護られながら、舞臺よりもれて来る所の音、離子の音を響きつゝ往生を遂げた中井さんたるもの、心ひそかに本懐としてゐるのではあるまいか。聞けば、その初舞臺の地がこの名古屋たつたといふ。ひよつとすると、御園座の舞臺がまたその初の舞臺たつたのかも知れぬ。

澤田座長在世中より、枯淡且つ高雅な藝風を示し、いつも腹心なきワキ役として重きをなしそのじきあとは、久松、野村、金井の諸君と共に、常人の障り易き野望を殺し、よく立場を自覺し、自重して、終始一貫、後進の指導教育に努め、若輩私の方針に従つて一座の進運に順應してくれた犧牲的精神に對しては、聲を大にし筆を極めて感謝し、推稱しなければならぬであらう。——七月末歸京の上、新國劇としての「追悼永別式」を行ふ筈であるが、旅先の劇場に



於て舞臺衣装のまま打ち倒れ、自宅へも旅宿へも歸ることが出来ず、病院へ運ぶこともならず、に他界した最高幹部中井哲氏の逝去に對し、私たちは最大級の用意を表したい考へである。

さて、こゝに残る問題は「新國劇」の現在と將來である。

幸に、中井さんその他先輩幹部の指導よろしきを得て、後進はすく／＼と成長し、漸く一人前の團體をなすまでには至つてゐる。東京を本據として、大阪、京都、神戸、名古屋の大劇場に轉戦し、一年申休み月なしの動靜をつゞけてはゐる。世界を擧げて不況極まりなき今日、悪まれすぎた行程のやうにも思はれる。が私たちは、たゞそれだけで私たちはいゝのか。亡き澤田座長が、安穩の日がたゞく時毎に何かの不安を感じ、自ら苦難を求めてこれと闘ひ、苦難に優る、幸を確得して來た過去十餘年の歩き方を私は見てゐる、知つてゐる。

今新國劇は、東に金井病み、首席幹部中井覺るの正に非常時である。しかし、五年前に澤田座長を失ふの超非常時にさへも堪へて來た私たちであるから、大がいの苦難苦難には驚かないだけの用意と覺悟はもつてゐるのであるか、それよりもこれよりも、もつと大きな超非常時は安否に馴れすぎた時の座員の氣持の弛緩である。中井さんの死を梗概とし、大きな刺激源として、いよく緊張、ますます結束、一致協力、

柳蛙精神の發揚に努力しなければならぬ今日である、今日の私たちである。來年は催さるべきであつた更生滿五年の記念の日を待たで逝つた中井さんのことは、考へても／＼残念であるが、この悲哀の中から、私たちは更に奮起一番中井さんの屍を乗り越えて、新國劇行進曲を一層高らかに歌ひつゞけなければならぬ。これ、澤田座長や中井さんの靈を慰むる唯一の供養でもある。

ともあれ「覺きことのはこの上に積もれかし、限りある身の力ためさむ」新國劇である。(七月、中座休業にて)

久松喜世子

永い年月、舞臺の友、座長じき後儀藤理事を始め一同の必死の覺悟を力にして、苦勞に苦勞を重ねながら共に手を取りあつて歩んで來た友の一人、中井さんと別れが、こんな早く來やうとは、私が後に殘されてその最後を弔ふとは、今も尚夢のやうに想はれます、眞に安らかな眠りで御座いました。舞臺人としてこれほど満足な死は御座いますまい。

全座員が心からなる看護の裡に永い眠りにつかれた中井さん、悲しくも亦羨ましくなりませぬ。

けれど私は徒らに歎き涙でゐる場合ではない、尚一層の勇氣を以て若き人々を勵まさせねばな

らぬと。中井氏逝き、金井氏又病む秋、その淋しき義まじさをおつと耐へて唯一途に……。

若人上躰きの中から奮ひ立て、苦しみを踏み越えて、一生懸命あの頂上へ進んでくれ、弱い女の私だがみんなの後を押しながら一生懸命に登るよ、そのお互の真剣さこそ先へ倒れた方々へ何よりの供養ではあるまいか。私も倒れるまでは、力の限り……たとへ私か力盡き、何時何處で倒れやうと、そのまゝ道傍へ捨て、行けふり返りもせず進んでおくれ、それに心を引かれぬやう、仕事の犠牲を必ず無駄にしてくれるな。何時、何處で倒れやうとも悔のない私だ、私は死んでも魂はこの大切な仕事の爲に精進する君達の上をきつとく守つてゐる……。

(中井さんの急逝、友を先立てた私の感想手記から)

島田 正吾

六月十二日午後十時十八分名古屋御園座に於て中井哲先生急逝、人格濃厚篤實、澤田先生亡き後の新國劇に於て慈母久松先生と共に終父の如く敬慕されつ、舞臺に立つや氣風昂扬にして高樞、明朗を誇る我が劇團中一人誇みたるの静けさを想はせ、較もすれば邪道に墮せんとする我等弟妹達に不言の教訓を垂れ、劇團繁榮の爲には蔭の形に添ふ如く、甘んじて自らを犠牲となしたる大先輩今はじし噫々！。

御臨終に際し係藤理事は座員一同を代表して詠別の辭を奏く、

「中井さん、永い間いろいろ御苦勞を御かけしました、座員一同心から御禮申し上げます今みんなはあなたの枕邊に集つてみます、座員弟妹達に見まもられ舞臺の柀の音を聞きつゝどうぞ誰かにお眠り下さいませ、我々はおなたにお別れする悲しみの中から奮ひ立つて



より結束、劇團の隆盛の爲に努力することを
お誓ひします……」

涙、涙、しかも開演中の舞臺からは賑やかな三味太鼓の音、涙に泣き濡れた顔を、白粉で粧ひ笑ひ顔さへ見せて舞臺に立つ座員の姿、武士の戦場とはかくも悲しきものなるにや、

東に金井先生病みひたすら其の恢復を祈る時大居臺を支へる長兄格たる大先輩を失ふ噫々新國劇非常時の秋、残されたものゝ責任はいよ

く協力團結、此の國劇非常時の打開に邁進せ
ずんば……

今や天上に再會の握手を交はす亡師、大先輩は何をか語る、目をつむれば何處からか聞こゆ懐しき御聲、

「畦の子よ、悲しみを踏み越えろ、新國劇の歴史を綴るもの、苦難苦闘純情の團結！」

小川虎之助

「春の夜の、地獄のおん歌父と見え、
母とも見えて夢多きかな」

今春、大菩薩峠の興八に扮されて、ものざれしものです、多感なでして慎ましい心構が、堪らなく懐かしく思はれます。

故人を偲ぶと言ふには、まだ悲しみが生々しいのです、

「今迄は、人の事だと思つたに、俺が死ぬとは、此双ア堪らぬ」

ト茶化して死んだ洒落人もありました。

吾々は、死と言ふ儼然な事實上に直面した時だけ、有繋に儼然として襟を正しますが、驟て、時の力に押し扱はれて、忘れる、油斷する、安心して懈けて仕舞ふ。

澤田先生を喪つた當時、矢張り今の様に、悲しみに緊張して居ました、その四月浪花座公演の時、中井先生は、澤田先生初演の大石内蔵助に扮されて。

袴はかまに薄くうすく汚これさへ、形見となれば拭ぬぐへざりけり」

と優やさしい感懐かんわいを洩もれられました。

然しかし、平常へいじょうは無口むくちで、己おのれを憐あはれする事ことの高い方かたでしたから、ある方面かたからは、種あま々な諷刺ふうさもされて居ゐりました。ムツツリ屋や、皮肉屋くにく、そんな風ふうに言いふ人もあつた様ようです。

實際じつじ舞臺ぶたいで相手の呼喚こゝろが悪いと、可あなり手酷てこくい事をやられた様ようですが、又また一面いっぺん、彼處あそこの呼喚こゝろが、どうも面白くないから合あはして下さい、と御自分おのれから、ノコノコ來きて下さる、優やさしい熱心ねっしんな方かたでもありました。

「思おもふ事こと、なかばを言いはず笑わらみつくる、卑性ひせい者ものにて、生きて來きて來きな」

此この弱よわさから來きる反射はんしや作用さくごんに、理解りかいと、同情どうじやうを持もたねばなりません。人はなか／＼眞實しんじつの姿すがたを見みせてくれない、私達わたしは澤山たくさんのカモフラージュされた人ひとを見るが、中井先生なかいせんせいは、その短歌たんかに依よつて、自分の本當ほんとうの姿すがたを示しして居ゐる、ある時は是こゝろに依よつて、御自分おのれの鬱憤うつぷんを晴はらして居ゐたのではないかと、思おもはれた時ときさへありました。

「舞臺ぶたいにて、争まがふ事ことのなくなりし(下の句失念)

と現在の御自分ごのれに、寂さびしい諦めあきらめを付けられた述懐じゆわいに、私わたしはひどく、胸むねを打うたれた事ことがあります。舞臺ぶたいの上うへの皮肉くにくも、強情きやうじやうも、此こゝろの争まがひの心こゝろから生うまれた、醜みにくい争まがひでない、精進しやうじんの、向上心かうじやうしんの發露はつろであつたのです。

その争まがひを捨てると言いふ！

然しかし、事實じじつは捨てられなかつた。

「午前十二時ぜんじふにじ、盃さかづきおきてふと舞臺ぶたいを、思おもふ時ときこそ、さびしかりけり」

飽迄あきまも舞臺ぶたいの執着しやくしやくを脱だし得えない中井先生なかいせんせい――

澤田先生さわだせんせいを失うつて、一番いちばん力を落おして居ゐたのは中井先生なかいせんせいであつたかも知しれませんが。

その中井先生なかいせんせい今いまやなし！

夢ゆめ多おほき春はるを過すして、忽たち高たかとして逝いられました。假初かりはつの眠ねりなら夢ゆめも見みろ、又また醒さめらるゝ事こともあらうもの、

意餘いよつて、言葉ことばが足りませんが、先生の最近さいしんの詠草えいそう二三二三を御紹介ごしょうかいして、ペンを擱おきます。

「芝居しばいはねて、ソツと入りたるおでんやに、我が噂うわさ聞くぬるき酒さけかな」

「氣きに入いらぬ書拔しよはくなれど、裂ききもせで、讀よみ居ゐるそばに手ては寝ねて居ゐり」

「せりふ一ツ、言いひ損とんじたるさびしさに、赤あかき花はななど、買かひて戻かへりぬ」

山路千枝子

澤田先生さわだせんせいがなくなつてから五年ごねん、まだ悲かなしみの消きえない内に又また中井先生なかいせんせいのとつぜんの逝い去さに遇あひ今は悲かなしみのどん底どんぞこに來きてしまいました。中井先生なかいせんせいとは故須藤子こむらたけのこさんの藝術座げいぶざから新園劇しんえんげきへと、ずつと一いつ緒いっしょに劇團げきだんの道みちを辿たどつて來きたわたくし、そしていつも陸りくになり日向ひなたになつて芝居しばい

の上うへにも平常へいじょうにもよく面影おもかげを見て下さいました。時ときには父親ちちの様に優やさしくして下さいました。

その昔むかし小石川こいしがわの江戸川えどがわべりのお婆おばへ伺うかがつては歌人うたひたである中井先生なかいせんせいにわたしの拙ちよい歌うたを見て頂たまいて懇切こんせつにこまかく教おしへを受けた事ことなど度々たびたびでした。それからそれへと思おもひ出では盡つきません。

安やすらかに笑わらしく逝いかれた中井先生なかいせんせい羨うらやましい位くらいです。

せめてなくなれる前まへ一言ひとことお言葉ことばが頂たまき度だけかつたのに、残念ざんねんでたまりません。

一人取り殘のこされた心細こころこまさを一生懸命いっせいけんめいはげます様ようにして居ゐる(追憶おひそめの涙なみだあらたになるばかりです。(六月二十六日京都南座樂屋きやうとにて)

畑中 蓼波

中井先生なかいせんせいはどんな人間にんげんであつたかと考かんがへて見る彼は酒さけに酔よつても、いゝ氣きになつてメートルをあげるやうな事は決きしてなかつた、人ひとにおだてられても、おだてに乗のることは絶對ぜつたいになかつた。俳優べいぎとしては相當さうじやう自惚おぼれも自信じゆんもあつた、だから自ら得意とくいとする演技げんぎでも褒ほめられると随分ずいぶんよろこびました、而しかし圖ずに乗のつて藝げい自じ慢まんをはじめるやうなことは絶對ぜつたいになかつた、初對面しよたいめんの人ひとに接あする時は、女のやうなおちよほ口くちをして耻はかし氣きにつつましげに話わすのが癖くせであつた。おそろしくお天氣屋あまぎやであつたが氣きが向むくと随分ずいぶん喋りもした、陸りくも利りいた。而しかし友人ともの間まを離間りかんす

るやうなことはしなかつた、負けん氣は強かつたが、尊大ぶつたり、虚勢を張つたりもしなかつた、心の中では周囲のものを輕蔑したり馬鹿にしたりして居た、彼は人を愛しなかつたが、人に對しても愛を要求しなかつた、所詮彼は憎人主義的の人であつた。かうした特色のあつた中井君が死の一ヶ月程前から私に對して目立つて人なつかしげな素振りを示すやうになつて居た。不思議なこともあるものだと思つて居たら間もなく死んでしまつた、後で聞いたのは私だけが、中井の變つたことに氣がついて居たのは私だけではなかつたさうだ。

彼が死んだ時は樂屋内の同情が期せずして彼の上に乗まつた、誰も彼も泣いた、或るものは聲を放つて泣いた。一見ひとつきあひの悪い彼ではあつたが、かくされた人間の善さが、知らず／＼人を引きつけて居たのではなかつたかと思ふ、悲しみの涙がみな心を和やかにした、彼の死の儼であつた。

長嶋 丸子

「かいセンセイ、思ひ出深い懐かしい文字で御座います、これからは二度とお呼びかけする事の出来ないお名前……もう何處の樂屋へまいりましたも「中井哲」といふ先生の名ひらは見られません。たゞこれからは今迄先生がお這入りになつてみらつしやつたお部屋で、ありし日

を徳ふより他御座いません。そして劇場が樂屋が變るたびに思ひは新たになつてまいります。先生は、ほんたうにお静かな方でした。お話なさるのにも何々ですか……でせう。などい。

此うしてペンをとり乍らも然性に懐かしくなつてまいります。それにお芝居の上でも多くの場合先生とつき合ふ事が多いものですから始終お話し致しいろいろお教へ下さるのにも「マルちゃん」と優しく、お静かで慈父のやうな



感じをあたへて下さいました。

先生はお身體は割合にお丈夫でみらつしやつたので、めつたにお休みなさる事も御座いませんでしたのに……御近親の方々、多くの人の看護も水泡に、静かに／＼お眠りになられてしまいました。

澤田先生が……今また中井先生も……、ほんたうに私共は淋みしゆう御座います。

でも淋しい／＼自分の氣持を披露する事は忘れません。先生方御存命時頂いた愛撫、御恩に報ゆるやう一生懸命藝道に勵みます。

雄島三之介

既に今は相對する事のかなはぬあの湯鏡、所在なげに煙草をくゆらし乍ら私の部屋に入つて來られたあの時の様子が髣髴とする。

「月形の序幕で今日は君の樂屋が兵衛を困らせやうと思つたがあまり君が眞面目なので僕もつりこまれて懸命に演つたよ」と云はれた私も今しがたの舞臺の様を思ひ浮べながら

「困らせつこで先生に大刀打するのは鳥籠がましい沙汰です、しかし、もし先生がなくなればたら天下に一文字役者が居なくなるわけですから一つうんといちめて下さい」

「いや僕が死くなくても雄島君が居るから大丈夫だよ」軽く一矢を酬ひられた私だつた、これが終生かの大先輩と、この不自兒とをへだつる最後の會話に他ならなかつた。

翌日私は萬感胸にせまる思ひで一文字國重の代役をつとめた、今も胸中に往來する先生の思ひ出は多々ある、健實な舞臺に、高雅な作歌とたゞふべき數々の思ひ出がある、人となりか地味で内氣な人だつただけに汲めどもつきない情味を多分におぼゆる。

文人が歿になると白玉硬中の人となると謂ふ

一體私等が死ぬと何處に歸するのだらう。
今主客を矢つた京都兩座の故先生の樂屋に一
人座して窓にせまる東山の緑に識らず涙新なる
ものが多い。

一葉 早苗

芝居終へて、そつと入りたるおでん屋に、
吾がうわさ聞くぬるき酒かな。

晩春の旅、雨降り續きの名古屋園座で月形
半平太の上演中わき役一文字國重の役を終へて
樂屋に化粧も落さず突然驚れた中井先生が最後
に歌み殘された句だと記憶します。

全く歌のやうにあまりにも淋しい一生の持主
でした。

故人澤田先生のわき役の第一人者として其の
演技に絶品を殘し文字通り新國劇に於ける樂の
蟲とまで銘された程で、澤田先生死後も更生新
國劇を支へ新人を擡して絶えずわき役の研究、
そして結局終生をこのわき役で貫徹されました
一口に云へばおしい方でしたが、現在の新國劇
にとつては泣くにも泣き切れない重要な方です
殊に先生より一足先に逝つた私の父南吉大郎と
は永年の舞臺同僚であつたゞけ向東中井先生の
死は私に様なな記憶と追憶が。

舞臺上の事は百事を盡すまでもなく世間の皆
様が周知の事と存しますから此處に改めて申上
げません。

平常の先生——演劇から一步離れた中井先生
——それが寧ろ中井先生の本當の面影にふさは
しい氣が致します。

無口で、どちらかと云へば、あまり陽氣な性
ではなく、それでゐて時々あの重さうな口から
飛出す突拍子もない洒落や輕句の一句々々の味
に腹を抱へさせられる事は珍らしくはありません
んでした。

それに最近特にひいきの方から色紙や短冊、
寄せ書などが著しくなつて參りました。勿論
無筆な私達にとつては一種のニガ手ですが、こ
んな時でも中井先生は其の都度名筆を振つて謝
まれる歌詩に何時も乍ら感心させられると同時に
自らを努力する氣になります。

圓滿な人品、そして詩人であり歌人である中
井先生——

舞臺の人よりも、もつとくその蔭にもたれ
た先生の趣味——歌の如く——
芝居を終へて一人淋しくおでん屋にのれんをく
ぐられる中井先生の姿、これが先生の裏面に寫
る淋しいカットです。

初瀬 音羽

佛様になられた先生の丁度二七日。人間の死
といふ事も人世といふものは……とアツサリか
たづければ中井先生の此度の死もアツサリとあ
きらめてしまへる世間一般の日常の一出事にし

かすまないかも知れない。

しかし發病以來三日三晩死に直面した先生を
みまもつてた私たちにとつてはいかにも心残り
がないやうで、一倍と残念におもへて未だにあ
きらめきれない何かを殘つて。

東京と關西……一年に何度も東海道の線の上
り下り、殊に夜汽車の多い私たち車中の先生は
大抵は深いねむりにおちられるのが常だつた。

汽車のはいる音の他は靜寂そのものゝやうな
車内の一隅からかきこえて来る……だ
れか？とおもつてみるゝ先生が心地よげにスヤ
／＼と寝んでみられる。

丁度それの如くに樂屋で倒れてしまはれた先
生はハタの者の變ひもしらぬ顔に息をひきとる
最後まで昏々と深いねむり、かるい鼾をつづけ
てみられた。これが「今はもう時間の問題です
」とまでにさし進つた命の先生の姿なのかしら
と度度もおもつてみた私だつた。

舞臺の先生はまた唾を時々出された、しかも
かなり大きいのを。いつだつたか？「茶々子
の審判でいたつてまじめに裁判長でおさまつて
た先生が突如！ステキにステキに大きなソレを
出された、そして流石におかしくおもはれたの
か自身でおもはずき出されて、裁判長かたな
しにニコ／＼となつてしまはれたことがあつた
そんな時の先生は日頃かきい皮肉まじりの冗談
口をきかれる平常よりは一層頼しみを感ずる中
井先生だつた。

ぶたいの先生、ぶだんの先生、とおもひ出はつきない。

しかし何といつても御園座に於ける最後まで……どうにかしてもう一度さめてほしいと願つた一同の志も無にやすらかなねむりをつげられた先生のおだやかな腰韻、そしてかすかな餅の音はいつまでもく私の心から去らない
(無雨晴の午後南座の樂屋で)

丸茂 三郎

中井先生の突然の死は我々新國劇に取つては多大の打撃と、淋しさを感じさせられました。其が餘りにも急激であつただけに唯夢の様な気がします。

子役時代から此の新國劇で育てられた僕は誰よりも一層の悲しみを味はひました。

澤田先生亡後の中井先生は第二の良き僕のお父さまであつて下さいました。

無駄口を聞かぬ良きお父さまは歌を作るのがお好きで一日二日と、たまの休みがあるのかならず他の芝居を見學に行かれては僕等に感想を聞かせて下さいました。

何日かもこんな事がありました、新歌舞伎座で荒神山が出ました時に中井先生は「神戸の長吉」久松先生は長吉の母、僕は加納屋の利三郎

でした。

中井先生はこの時は僕の親分でした。僕等の良き母で有り先生である久松先生は親分の御母様でした。僕はこの兩先生を前に置いて僕の戀敵である熊五郎と蛤の間違ひから喧嘩になる、その物語りをしてゐる途中で僕が絶句してどうしても後が出て来ないのです。久松先生は心配して自分のセリフを後先に云つて下さいました。僕は只ホットしました、その時僕の第二の御父様中井先生事神戸の親分が亂れた糸を緋屋にホグして下さいました、その場はそれで無事に終りましたが、幕になつて直ぐに中井先生のお部屋へお詫に行きますと中井先生は何んでもなかつた時と同様に「あゝ、好いよ」と禮單に云はれただけでした、その簡潔な言葉の中にも慈愛がこもつて居られました。

澤田先生の残された演劇向上の仕事の色々苦痛と戦はれ下らぬ事に道草喰ふ僕等を教訓し守護して来て下さいました良きお父さまは六月の旅の最初の名古屋で残念にも斃れてしまはれましたがそれは御儀としては最も良き最後を飾れて澤田先生の許へ逝かれました。

中井先生の病中の方々から有難い御見舞状を下さいました。

そして遂に歸らぬ人となられた後は力を落さ

ぬ様にしつかりやお前達の責任は重大がぞ中井を無駄死にさせせるな中井の死に依つて向上せよと云ふ様な御手紙を澤田山頂きました。

中井先生の死は新國劇に取つては非常時です御園の爲に倒れる兵隊と演劇藝術の爲に倒れた中井先生とは立場こそ違へ氣持の上に於いては違ひは有りません。

その勇ましい立派な死に對して僕達は何を待つて報ひればいゝのか？

それは澤田先生が殘された仕事を中井先生が悪戦苦闘されながらも良く堪へ忍んでやつて來られた様に僕達も中井先生と同様倒れる迄戦ふそれだと思ひます。

勿論中井先生一人が苦闘を續けられたのでは有りません。

その陰には依藤理事、野村、金井先生それに僕等の久松先生が家られた事け云ふには及びません。

最後に中井先生の死をいたむと同時にこゝに柳畦神を發揮して同一一致團結してよき良き演劇向上の道に進む事を誓願すると同時に地下の澤田先生と共に安らかに永睡しられる様にして僕達の仕事を何時もお守り下さる様にお願ひする次第です。

編輯後記

カンナの花が灼熱の大陽の直射を浴びて勢よく窓下に咲いてゐる。蘭の一鉢が健康さうなプリシヤン・プリューの肌を栽培棚の上にさらけてゐる。

校正に來かけてから三日目。輪轉機の音が、急せき立てるやうに耳を打つ。

暑いなど云つて居られない、一生懸命ガンバツてゐる。

正午ひるさがり突然夕立がやつて來た、——颯と一陣、涼風

が窓外に湧いて、ほッと一息、生氣がよみがへつた。

やがて、雨足がまばらになると、雷鳴も遠のいて行く。

灰色の雲をかきわけて、又もやギラ／＼と陽の光が射して來た。

×

けふは七夕——子供達は今宵、牽牛、織女の戀の祭壇に

さしげる「星まつり」の用意にいそがしさうである。

(田中 生)

昭和八年七月一日發行

月刊『道頓堀』 第八十二年 第八十二號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◇御相談の上廣告掲載の要めに應じます

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵送料別)

昭和八年六月卅日印刷

昭和八年七月一日發行

大阪市南區難波新地三番町

編輯者 鳥江 隼也

印刷者 松本 泰三

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町(大阪歌舞伎座内)

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

ASAHI BEER
ASAHI LAGER BEER
飲用清涼
大日本酒造株式會社 道頓堀管内

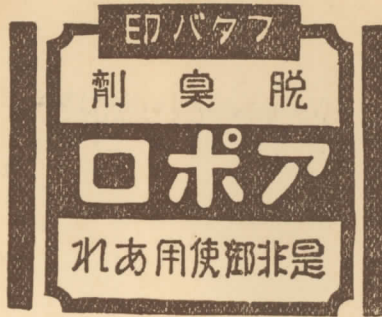
便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（錢拾五金小瓶一定價）
（圓壹金大瓶）

△使用法 一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅く冷所に置かるべし。



使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

家庭必備品

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒ではありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異び化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残りぬ爲め没取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用里が僅かですから經濟にもなります。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

發 賣 元

電話本局三三一五番
振替大阪三三一一七番

光 榮 商 會

大阪市東區
伏見町三丁目

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和八年六月廿一日印刷
昭和八年七月一日發行
(一月一回)

愈々七月中旬封切

林長二郎主演

衣笠貞之助脚色監督

尾上榮五郎 特別出演
飯田蝶子 出演
飯塚敏子 助演

オール・トーカー
燈籠



夏季大作

「道頓堀」第八十二輯 第八年七月號

一部 金參拾錢